兵庫県古代官道関連遺跡
調査報告書Ⅴ

令和5(2023)年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県古代官道関連遺跡
調査報告書Ⅴ

令和5(2023)年3月

兵庫県教育委員会

例　言

1　本書は、兵庫県立考古博物館の研究テーマの１つである「兵庫県内における古代官道に関する調査研究（第Ⅳ期）」に伴う報告書で、文化庁より補助金の交付を得ている。

2　今回の報告に係る調査は、平成30年度に写真地図作成、令和元年度・２年度に発掘調査、令和３年度・４年度に出土品整理作業と報告書作成を実施した。

3　調査の進行にあたっては、古代官道調査委員会を組織し、調査の各段階で委員会における検討を加えた。委員会の委員は、玉田芳英（独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所）、馬場基（同前）、増渕徹（京都橘大学）、菱田哲郎（京都府立大学）の４氏に委嘱した。

4　上郡町高田地区の写真地図の作成は、株式会社ジオテクノ関西と委託契約を交わして行った。

5　本書の第６図は、兵庫県教育委員会発行「兵庫県遺跡地図」（令和２年３月発行）の70「上郡」71「二木」をもとに加工している。図版１・２の地形図は上郡町発行の１／2,500「基本都市計画図 49・58」（平成９年３月作図）をもとに作成した。第３図、第５図、図版２およびの写真図版１の空中写真は国土地理院 C5-0008,C6-0008（昭和39年撮影）、写真図版２の空中写真は国土地理院 CKK20102-C11-26（平成22年撮影）を用いた。

6　本書の図版に示す方位は国土座標第Ⅴ系に則っており、座標値は世界測地系である。水準高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を基準とした海抜高度である。

7　本文については池田征弘・中川渉・新田宏子が分担執筆した。文責については目次に表記している。編集は、池田・中川が担当した。

8　本報告にかかわる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館が管理・保管している。

9　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

上郡町教育委員会、上郡町佐用谷自治会、（公財）兵庫県まちづくり技術センター、ひょうご考古学倶楽部、福泉寺
池田笙子、大嶋昭海、大西貞夫、大西隆文、小野潤子、金澤佐恵子、川西真実、岸悦子、小坂謙吉、坂井勝代、坂本敏夫、島田拓、竹内裕美、中川恵子、西田管男、前川淳子、矢能基史
（敬称略、五十音順）

目　次

第１章　調査研究の契機と経過（中川）
　第１節　調査の趣旨 …… 1
　第２節　第Ⅰ～Ⅲ期調査について …… 1
　第３節　第Ⅳ期調査について …… 4
第２章　高田駅家と辻ヶ内遺跡（池田）
　第１節　従前の研究 …… 8
　第２節　辻ヶ内遺跡の発見と事前の調査 …… 9
第３章　辻ヶ内遺跡の調査成果
　第１節　遺跡の位置と環境（池田） …… 15
　第２節　確認調査の概要（池田） …… 17
　第３節　遺構について（池田） …… 18
　第４節　遺物について（池田・新田） …… 21
第４章　まとめ
　第１節　辻ヶ内遺跡出土瓦の検討（池田） …… 27
　第２節　辻ヶ内遺跡出土土器からみた遺跡の年代（新田） …… 33
　第３節　高田駅家について（池田） …… 34

挿図目次

第１図　兵庫県下の古代官道と駅家…… 2
第２図　駅家の立地…… 10
第３図　平野部の条里と余剰帯…… 12
第４図　辻ヶ内遺跡付近３Ｄオルソ写真…… 13
第５図　佐用谷の小字名…… 14
第６図　遺跡の位置図…… 16
第７図　タタキ目の分類…… 24
第８図　類似するタタキ目…… 29
第９図　長坂寺式・北宿式の軒瓦…… 30
第10図　北宿式軒平瓦の細部…… 30
第11図　播磨国府系鬼瓦…… 32
第12図　築地の比較…… 35
第13図　辻ヶ内遺跡の遺構…… 35

表・付表目次

表１　辻ヶ内遺跡調査一覧表…… 6
表２　出土瓦の重量と個体数…… 27
表３　平瓦のタタキ目の分類別数量…… 28
表４　平瓦のタタキ目の分類別比率…… 28
付表１　土器一覧表…… 39
付表２　瓦一覧表…… 40

写真目次

写真１　出土遺物のネーミング…… 7
写真２　出土遺物の接合…… 7
写真３　実測図のトレース…… 7
写真４　第２回古代官道調査委員会…… 7
写真５　同左　出土遺物の観察・検討…… 7

図版目次

図版１　調査地地形図
図版２　トレンチ配置図
図版３　Ｔ１平面図・断面図
図版４　Ｔ２平面図・断面図
図版５　Ｔ３平面図・断面図
図版６　Ｔ４平面図・断面図
図版７　Ｔ１・Ｔ２　土器
図版８　Ｔ３・Ｔ４　土器
図版９　瓦１　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦
図版 10　瓦２　丸瓦
図版 11　瓦３　丸瓦
図版 12　瓦４　丸瓦
図版 13　瓦５　平瓦Ｈ１類
図版 14　瓦６　平瓦Ｈ２類
図版 15　瓦７　平瓦Ｈ２・３類
図版 16　瓦８　平瓦Ｈ３・４類
図版 17　瓦９　平瓦Ｈ５類
図版 18　瓦 10　平瓦Ｈ６類
図版 19　瓦 11　平瓦Ｈ６類
図版 20　瓦 12　平瓦Ｈ６類
図版 21　瓦 13　平瓦Ｈ７類
図版 22　瓦 14　平瓦Ｈ７・８類
図版 23　瓦 15　平瓦Ｈ８類
図版 24　瓦 16　平瓦Ｈ８類・熨斗瓦
図版 25　瓦 17　鬼瓦

写真図版目次

写真図版１　高田地区空中写真　国土地理院
　　昭和 39 年撮影
写真図版２　佐用谷付近空中写真　国土地理院
　　平成 22 年撮影
写真図版３　調査地遠景　東から
　　調査地遠景　北から
　　調査地遠景　北西から
写真図版４　Ｔ１　全景　西から
　　Ｔ１　全景　東から
写真図版５　Ｔ１　築地　南から
　　Ｔ１　築地　北から
　　Ｔ１　築地　北西から
写真図版６　Ｔ１　築地　北東から
　　Ｔ１　ＳＸ０２　南から
　　Ｔ１　ＳＸ０２　北西から
写真図版７　Ｔ１　ＳＸ０１　南東から
　　Ｔ１　ＳＸ０１　瓦出土状況
　　南東から
　　Ｔ１　ＳＸ０１　瓦出土状況
　　北から
写真図版８　Ｔ２　全景　北から
　　Ｔ２　全景　南から
写真図版９　Ｔ２　北半東壁　土層断面
　　西から
　　Ｔ２　東壁　土層断面　南西から
写真図版 10　Ｔ２　築地　東から
　　Ｔ２　築地　土層断面　西から
　　Ｔ２　築地・ＳＸ０３　北東から
写真図版 11　Ｔ２　ＳＸ０３　瓦出土状況　北
　　東から

Ｔ２　ＳＸ０３　鬼瓦出土状況　北東から
Ｔ２　石列　東から
写真図版 12　Ｔ３　全景　北から
Ｔ３　西壁　南東から
写真図版 13　Ｔ３　北端部土石流　土層断面　北東から
Ｔ３　南部拡張区　西から
Ｔ３　南部拡張区　石列　南から
写真図版 14　Ｔ４　全景　東から
Ｔ４　全景　西から
写真図版 15　Ｔ４　北壁　土層断面　南東から
Ｔ４　東端部　北から
Ｔ４　東端部　西から
写真図版 16　Ｔ４　ＳＸ０４　北から
Ｔ４　ＳＸ０４　西から
Ｔ４　ＳＸ０４　北から
写真図版 17　Ｔ４　ＳＸ０４　須恵器・製塩土器出土状況　北から
Ｔ４　整地層　西から
Ｔ４　整地層　東から
写真図版 18　Ｔ４　西拡張区　西から
Ｔ４　西拡張区　土層断面　南西から
Ｔ４　西拡張区　西端土層断面　南から
写真図版 19　Ｔ１　重機掘削　東から
Ｔ２　遺構検出　南から
Ｔ４　遺物検出　東から
Ｔ４　埋め戻し　西から
令和元年度地元説明会
令和２年度地元説明会
令和元年度古代官道調査委員現地指導
令和２年度古代官道調査委員会
写真図版 20　土器（１）
写真図版 21　土器（２）
写真図版 22　軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦（１）
写真図版 23　丸瓦（２）
写真図版 24　丸瓦（３）・平瓦（１）
写真図版 25　平瓦（２）
写真図版 26　平瓦（３）
写真図版 27　平瓦（４）
写真図版 28　平瓦（５）
写真図版 29　平瓦（６）
写真図版 30　平瓦（７）
写真図版 31　平瓦（８）
写真図版 32　熨斗瓦・鬼瓦

第１章　調査研究の契機と経過

第１節　調査の趣旨

平成19年10月に開館した兵庫県立考古博物館は、その事業計画の１つの柱として「地域文化の成り立ちを解明し、新たな地域像を創り出すため、総合的・学際的な体制による調査研究を推進し、その成果を発信・活用する」ことを掲げた。そうした目標に沿った調査研究事業の個別研究分野を設定するにあたり、兵庫県全域をエリアとし、県下市町との連携を図りながら進めることができる課題として、「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」を研究テーマに選定した。

山陽道・山陰道・南海道という３本の主要な古代官道が県内を通る兵庫県にとって、「交通・交流」は地域文化を解くキーワードであり、最もふさわしいテーマであると考えた。特に山陽道は兵庫県内において、摂津地域と播磨地域の広い範囲で明瞭に痕跡を残している。

従来、古代官道や駅家の研究は発掘調査によらない考古学的研究や地理学的研究が中心であったところ、昭和57年度以降のたつの市小犬丸遺跡の発掘調査で、布勢駅家の実態が明らかになった。その後、上郡町落地遺跡の発掘調査で野磨駅家の実態が明らかになり、平成18年に「山陽道野磨駅家跡」として史跡に指定された。このように兵庫県における古代官道や駅家の調査・研究は全国をリードしてきた分野である。

こうした好条件に恵まれる一方、山陽道の上記以外の駅家についての実態は明らかでなく、さらに山陽道・南海道の駅家にいたっては、断片的に関連資料が知られているにすぎなかった。そこで、これまで研究されてきた成果の蓄積を活かしながら、古代官道に関する調査研究を進めることにより、さらなる古代官道・駅家の実態が明らかになると考えられた。

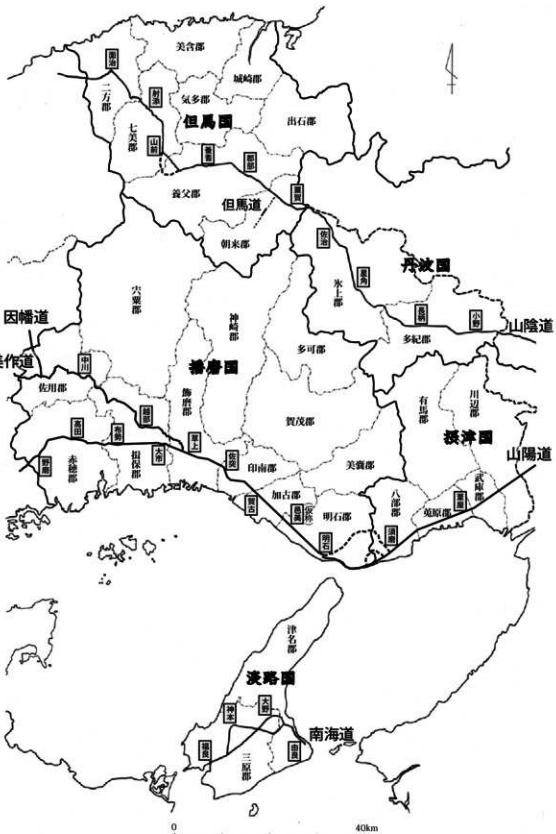
第２節　第Ⅰ～Ⅲ期調査について

１　第Ⅰ期調査（平成 19 ～ 21 年度）

県下を通る山陽道・山陰道・南海道という３本の主要な古代官道とその支路を分布調査するとともに、関係する各市町教育委員会に取材して、古代官道と駅家推定地の現状把握を行った。

次いで、実際に調査を行うフィールドとして「賀古駅家」とされる加古川市古大内遺跡と、仮称「邑美駅家」とされる明石市長坂寺遺跡という２箇所の駅家推定地を選定した。両地点は県下の駅家の中で考古博物館に最も近く、調査対象範囲も限定できるという利点が揃っていた。平成19年度に空中写真測量によって両遺跡の地形図を作成したところ、以前から方形地割の存在が知られていた古大内遺跡に加えて、長坂寺遺跡においても正方位の地割がＬ字状に認められることが判明した。

平成20年度からは、古代官道の調査を本格的に着手するにあたり、兵庫県内の古代官道の調査と保護活用の方法の検討を目的とした「古代官道調査委員会」を組織し、山中敏史（独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所）、馬場基（同前）、木本雅康（長崎外国語大学）の３名の学識経験者に委員を委嘱した。平成20・21年度には両遺跡で地中レーダー探査を行い、地下の状況の間接映像を作成した。その情報をもとに、古大内遺跡で平成20・21年度の２度にわたる確認調査を実施した結果、古代山陽道の側溝と、山陽道から駅館院へ向かう進入路、駅館の築地側溝などを検出し、山陽道に面した東側に駅家の入口を特定するという大きな成果を得た。



第１図　兵庫県下の古代官道と駅家

調査に対する関心は高く、平成21年３月28日の現地説明会には378人、同年７月20日の現地説明会には250人の参加者があった。平成22年３月20日には考古博物館講堂において公開講座「徹底討論・どこまで見えた!?古代の道と駅家」を開催し、賀古駅家の駅子集落といわれる加古川市坂元遺跡の調査成果を加えた、山陽道の駅家研究の最前線を提示した。

平成21年度末には、平成19年度から21年度までの成果をまとめた『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告第384冊）を刊行し、第Ⅰ期の事業を終了した。

２　第Ⅱ期調査（平成 22 ～ 24 年度）

古代官道調査委員会は第Ⅰ期の委員に坂井秀弥（奈良大学）を加えた４名に委嘱した。平成22年度の調査は仮称「邑美駅家」と推定される長坂寺遺跡の、遺構の存在や内容を把握するための確認調査を行った。第１回の古代官道調査委員会を平成23年１月15日に開催し、第Ⅱ期調査の方針と、当年度調査の計画をした。

発掘調査は平成23年１月25日～ ３月11日の28日間で実施した。調査の結果、駅家に関する遺構について大きな発見があり、３月６日の現地説明会には約300名の参加者があった。調査期間中の３月５日に現地で開催した第２回の委員会では、長坂寺遺跡の調査の指導・検討を中心議題とした。その他、次年度以降の調査を見据えて、古代山陽道の痕跡が残るとされている城池地区（加古郡播磨町野添城２丁目）付近の１／500地形測量図を、平成19年度に撮影した空中写真をもとに作成した。

平成23年度の調査は、11月１日に開催した第１回の古代官道調査委員会で調査の計画を審議した。委員会では、築地痕跡の可能性が指摘されていたA-２区南辺の農道部分の調査の必要性が強く打ち出された。これにより、農道と南側の畑地についての部分的な調査計画をたてた。

確認調査は平成24年２月16日から20日までの５日間で、農道を断ち割るトレンチ調査を行った。期間中の２月19日に第２回の委員会を現地で開催した。内容は長坂寺遺跡の調査の指導・検討および次年度以降の事業計画などが中心議題で、次年度以降の調査方針として、古代官道関連遺跡の対象エリアを現段階ではあまり拡大させずに、まずは播磨の山陽道に絞って実績を積み上げていくという方向性が打ち出された。

また、長坂寺遺跡の出土品整理作業（遺物の洗浄など）を実施した。さらに、次の調査対象として念頭に置いている「大市駅家」（姫路市向山遺跡）付近を起点に、古代山陽道のルートがよく遺存している「布勢駅家」（たつの市小犬丸遺跡）までの区間について、空中写真撮影を行った。

平成24年度は、長坂寺遺跡の出土品の整理作業を行うとともに、次年度以降の第Ⅲ期調査を計画している「大市駅家」に関係する、姫路市太市中に所在する向山遺跡の予備調査を実施した。

平成25年１月26日に古代官道調査委員会を開催し、長坂寺遺跡の調査報告内容の検討と、「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」の第Ⅲ期調査の事業計画についての審議を行った。この結果、第Ⅲ期事業として「大市駅家」の本格的な調査を進めることとなった。年度末には『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第455冊）を刊行し、第Ⅱ期の事業を終了した。

３　第Ⅲ期調査（平成 25 ～ 28 年度）

平成25年度から当初は３箇年計画で、揖保郡の大市駅家推定地である向山遺跡を対象とした。古代官道調査委員会は第Ⅱ期の会長山中敏史が勇退し、独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所の玉田芳英

を加えた４名に委嘱した。

平成25年度の調査は「大市駅家」付近の駅路の位置が確定していないことから、向山遺跡において駅路推定地の調査を行った。分布調査及び地元への聞き取り・地籍図・地形図調査などを経て、山麓を最短距離で結ぶ路線を有力とみて、推定路線上の休耕田２箇所での確認調査を実施した。確認調査は平成26年２月４日～２月22日の13日間で実施し、２月15日の現地説明会には30名の参加者をえた。当年度の古代官道調査委員会の開催は日程調査がつかず、個別に現地指導をいただいた。

平成26年度の調査は、まず６月15日に開催した第１回の古代官道調査委員会で調査の計画を審議した。委員会では、さらなる古代山陽道駅路の確定と大市駅家本体の調査の必要が説かれた。これにより、本体部分とその北側の駅路推定地部分についての調査計画をたてた。

確認調査は平成26年12月５日～12月25日までの14日間で実施し、12月20日の現地説明会には54名の参加者をえた。期間中の12月18日には第２回の委員会を現地にて開催した。当年度までの調査で駅路の路線が判明し、駅館院の位置も推定できたが、駅館院中心部には調査が及んでいないため、発掘調査を１年延長し、調査期間を４箇年とすることとした。

なお、兵庫県立考古博物館特別展「古代官道　山陽道と駅家」（会期：平成26年４月19日～６月22日）と上郡町郷土資料館で開催した兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展「古代山陽道と野磨駅家」（会期：平成26年９月20日～11月24日）において、古代山陽道や駅家調査研究の最新成果を公開した。

平成27年度の調査は、「大市駅家」の駅館院中心部と推定される部分について確認調査を実施した。調査期間は平成27年10月15日～11月11日までの20日間で実施し、11月30日には姫路市立太市小学校６年生及び引率者20名の見学があり、11月１日の現地説明会には100名の参加者をえた。11月30日に古代官道調査委員会を開催し、現地指導を得た。調査地点が駅館院である可能性が高まったという評価を得たが、建物配置については不明な点が多いとの指摘を得た。

平成28年度の調査は向山遺跡出土品整理作業及び報告書作成を中心においた。古代官道調査委員会は第１回目を平成28年10月21日、第２回目を平成29年３月10日に開催し、兵庫県を特徴づける遺跡の研究事業として継続することが望ましいと提言いただき、平成30年度は平成19年度に行った県内駅家推定地の分布調査の報告書の作成、第Ⅳ期事業として辻ヶ内遺跡（赤穂郡上郡町：高田駅家推定地）を調査対象とする方針を決定した。

年度末には『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅲ』（兵庫県文化財調査報告第494冊）を刊行し、第Ⅲ期の事業を終了した。

第３節　第Ⅳ期調査について

平成29年度から平成34年度（令和４年度）までの６箇年計画で、第Ⅳ期調事業を開始した。

古代官道調査委員会は第Ⅲ期の会長坂井秀弥が勇退したことから、玉田芳英（独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所）、馬場基（同前）、木本雅康（長崎外国語大学）の３名の学識経験者に委嘱を予定していたが、平成29年度より長らく委員を務めていただいていた木本氏の急逝により、平成29年度については玉田委員・馬場委員の２名で組織することとなった。

平成30年度からは、新たに増渕徹（京都橘大学）、菱田哲郎（京都府立大学）の両委員を加え、上記の２名と併せた４名で構成することとした。委嘱した委員は下記のとおりである。

会長　玉田芳英（独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所）：考古学

委員　馬場基（独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所）：文献史学

委員　増渕徹（京都橘大学）：古代史　※平成30年度から

委員　菱田哲郎（京都府立大学）：考古学　※平成30年度から

さらに平成30年度からは、学芸課以外の館員および他機関の職員を事業のメンバーに加え、共同研究員として上郡町教育委員会の島田拓、（公財）兵庫県まちづくり技術センターの垣内拓郎、研究員として当館学習支援課の新田宏子が参加した。

1　分布調査等のまとめ（平成29年度）

平成19年度に実施した分布調査結果のうち山陽道・美作道部分について、踏査で採集した遺物の資料化、追加的な分布調査、および他機関等が所蔵する駅家関連遺跡出土の遺物の調査を行った。

追加的な分布調査は、平成19年度調査時に都市化が進んでいることなどから省略された地点（伊丹市・芦屋市・神戸市・佐用町）や、新たに関連する遺跡が発見された地点（明石市）などについて実施した。また駅家関連の遺跡から出土した遺物については、願栄寺（上郡町）所蔵神明寺遺跡出土瓦（平成29年8月3日資料調査）、加古川市教育委員会所蔵古大内遺跡・野口廃寺出土軒瓦（平成29年6月23日・7月6日資料調査、7月6日～9月29日資料借用）、明石市所蔵長坂寺遺跡・大蔵中町遺跡出土軒瓦（平成29年7月19日資料調査、8月9日～9月29日資料借用）、上郡町教育委員会所蔵落地遺跡出土軒瓦（平成29年7月25日資料調査、8月30日～9月29日資料借用）の調査を実施した。

分布調査成果と駅家関連遺跡出土遺物の調査報告書作成は学芸課の池田征弘が担当し、遺物の接合・復元、実測及び図面の整理・トレースについて専従する職員として八木和子・柏原美音・佐々木誓子を雇用した。遺物写真撮影については学芸課岡田章一・池田が行い、八木が補佐した。

古代官道調査委員会は平成30年3月2日に開催し、玉田会長、馬場委員の2名と、主管課である県教育委員会文化財室の永惠裕和技術職員、事務局として当館からは平田博幸事業部長・藤田淳学芸課長・深井明比古・山上雅弘・鐵英記・池田、それにオブザーバーとして上郡町教育委員会教育総務課の島田拓学芸員が出席した。平成30年度から予定している辻ヶ内遺跡（赤穂郡上郡町：高田駅家推定地）の調査については、初年度に遺跡探査を行う計画を立てていた。しかし探査は経費的に面積が限られることもあり、それよりは地形分析を行う上での基礎資料となる圃場整備以前の地形図が存在しないことから、まずは圃場整備以前の空中写真を用いた地形図の作成を優先することになった。

年度末には、平成19年度に実施した山陽道・美作道部分の分布調査結果のまとめとして、『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅳ』（兵庫県文化財調査報告第500冊）を刊行した。

2　辻ヶ内遺跡（高田駅家）の調査（平成30～令和4年度）

平成30年度は、次年度から確認調査を実施する辻ヶ内遺跡周辺の、圃場整備以前の地形を復元した写真地図を作成し、条里や山陽道の路線・駅家の位置などを検討した。また古大内遺跡（加古川市）など駅家関連遺跡出土遺物の実測等を行った。

この年度から新たに加わった研究員による第1回の研究会を平成31年2月7日に開催して、学芸課の池田、共同研究員の島田、垣内、研究員の新田が出席し、駅家に関する研究史や遺物の検討を行った。その研究会の成果を受けて、3月11日に委員会を開催し、玉田委員長、馬場委員、菱田委員、主管課として県教育委員会文化財課の永惠裕和技術職員、事務局として当館からは学芸課の藤田課長・池田、そ

れに島田共同研究員、垣内共同研究員、新田研究員が出席した。委員会では写真地図の検討から導き出された確認調査の計画が了承された。この委員会の審議結果をもとに地元交渉を行い、上郡町教育委員会の協力のもと、土地所有者の承諾を得た。

令和元年度は、辻ヶ内遺跡の確認調査を令和２年２月19日～ ３月19日の18日間で実施した。調査は学芸課の池田が担当した。発掘・埋戻し作業に関わる機械掘削や人力掘削は、有限会社松浦興業に作業委託した。調査では駅館院の外郭線の南辺と西辺と予想される部分に２本のトレンチを設定した。その結果、予想ラインの内側から瓦溜が見つかり、圃場整備以前の畦畔が築地基礎を踏襲したものと推定できるにいたった。瓦には播磨国府系瓦の古大内式軒丸瓦、北宿式軒平瓦、鬼瓦などが含まれており、同地に高田駅家が所在する可能性が高まった。調査期間中には地元対象の見学日を設け、３月11日に21名、３月12日に13名の見学者があった。古代官道調査委員会については、新型コロナウイルス感染防止のため開催を見送り、発掘調査現場において、２月25日には増渕委員、３月12日には菱田委員に、個別に指導をいただいた。その他、同年度には、布勢駅家推定地の小犬丸遺跡（たつの市）出土遺物の類例調査を行った。

令和２年度は、辻ヶ内遺跡の確認調査を令和３年２月24日～ ３月17日の15日間で実施した。調査は学芸課の池田が担当した。発掘・埋戻し作業に関わる機械掘削や人力掘削は、株式会社マツダ建設に作業委託した。調査では駅館院の外郭線の北辺と予想される部分と、駅館院内部の状況を確認する箇所にそれぞれ１本のトレンチを設定した。その結果、北辺と予想される箇所は耕地整備による削平を受けていたが、駅館院内部と目される箇所では瓦溜が確認され、播磨国府系瓦の長坂寺式軒丸瓦が出土した。調査期間中には地元対象の見学日を設け、３月14日に19名の見学者があった。古代官道調査委員会は３月９日に現地視察ののち上郡町郷土資料館で開催し、玉田会長、馬場委員、当館の和田晴吾館長、学芸課の中村弘課長・池田、それに島田共同研究員、垣内共同研究員、新田研究員が出席し、検出した遺構についての評価・検討を行った。なお、当日欠席であった菱田委員は３月５日、増渕委員は３月11日に個別に現地を視察し、調査の指導をいただいた。

表１　辻ヶ内遺跡調査一覧表

遺跡調査番号	遺跡名	所在地	調査種別	調査担当者	調査期間	調査面積
2019087	辻ヶ内遺跡	赤穂郡上郡町佐用谷 120・121・122	確認調査	池田征弘	令和２年２月19日～３月19日（18日間）	40㎡
2020116	辻ヶ内遺跡	赤穂郡上郡町佐用谷 121・122	確認調査	池田征弘	令和３年２月24日～３月17日（15日間）	51㎡

令和３年度は、令和元・２年度に実施した辻ヶ内遺跡の確認調査で出土した遺物の洗浄・ネーミング、台帳整理および調査図面の整理などを行い、調査成果報告書作成に向けての準備を進めた。

令和４年度は、辻ヶ内遺跡の調査成果報告書を学芸課の池田征弘課長・中川渉が担当し、出土遺物の洗浄・ネーミング・接合・復元・実測・拓本・トレース・写真撮影、調査図面のレイアウト・トレース、各写真のレイアウト、編集作業を行った。整理作業のうち、出土遺物の接合・復元・実測・拓本・トレース、調査図面のレイアウト・トレースに専従する職員として、柏木明子を雇用した。遺物写真撮影は学芸課藤原怜史が行い、中川が補佐した。また、遺物のネーミングにあたっては、ひょうご考古学倶楽部

の金澤佐恵子、川西真実、岸悦子、小坂謙吉、坂井勝代、坂本敏夫、竹内裕美、中川恵子、西田管男、前川淳子の各氏に協力をいただいた。脆弱な遺物については、（公財）兵庫県まちづくり技術センター大嶋昭海主任の協力を受け、樹脂（ナチュラル コート）で表面処理を行った。遺物の復元に際しては、同 小野潤子企画技術員から技術指導を受けた。

令和４年度の第１回古代官道調査委員会は５月20日に、第２回の委員会は12月９日に考古博物館で開催し、いずれの回も玉田会長、馬場委員、増渕委員、菱田委員、文化財課の岡田大雄技術職員、当館の前川浩子副館長、中村弘館長補佐、学芸課の池田課長・中川・篠宮正、上郡町教育委員会の島田共同研究員、垣内研究員（令和４年度より当館加西分館に異動）、新田研究員が出席した。委員会では辻ヶ内遺跡の調査報告書の内容、研究成果を総括した展覧会の方針、次年度以降の研究事業の計画などについて審議された。なお、第２回委員会に先立って、10月27日に古代官道調査成果検討会を開催し、学芸課の池田課長・中川・篠宮と、島田共同研究員・垣内研究員が参加して、整理中の遺物の観察・検討を行った。その中で、瓦の分類案や、鬼瓦に対する評価などが提示された。その検討成果も第２回委員会で報告され、併せて出土遺物の観察・検討を行った。

年度末には『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅴ』（兵庫県文化財調査報告第530冊）を刊行し、第Ⅳ期の事業を終了した。

※文中の肩書きは、いずれも当時のもの

写真１　出土遺物のネーミング

写真２　出土遺物の接合

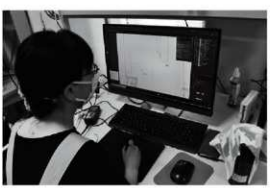


写真３　実測図のトレース

写真４　第２回古代官道調査委員会

写真５　同左　出土遺物の観察・検討

第２章　高田駅家と辻ヶ内遺跡

第１節　従前の研究

高田駅家は『延喜式』兵部省駅伝条に記載される山陽道の播磨国に属する９箇所の駅家のうちのひとつで、記載順では西から２番目に位置する駅家である。その所在地については、18世紀に編纂された地誌『播磨鑑』で赤穂郡の道筋の項において『延喜式』兵部省駅伝条を引用し、高田については「高田ハ高田ノ郷今ノ宿也」と記されるように、江戸時代には上郡町南東部に位置すると考えられていた。

高田の地名は、現在「たかた」と読まれ、大字名としては高田台としてしか使用されていないが、その他、河川名として高田川、高田小学校・高田公民館など複数の大字の領域を含む広域呼称としては使用されている。この高田という地名は『和名類聚抄』に記される古代の赤穂郡に属する「高田郷」に由来する。建武４年（1337）には「高田」が赤松円心によって法雲寺に寄進されていることから、鎌倉末期には荘園化していたとみられ、15世紀までは「高田庄」の表記がみられる。「高田郷」については「高田庄」と併行して表記がみられ、16世紀まで使用が確認できる。江戸時代に入り、慶長年間には支配の単位が現在の大字に引き継がれる各村に分割されるが、「高田」の呼称は元禄・天保の国絵図において村名とは別に記されていることから広域呼称として使い続けられたようである。

明治22年（1889）に町村制が施行され、高田中野村、正福寺村、神明寺村、宇治山村、宇野山村、小野豆村、奥井新村、奥井村、奥村、休治村、釜島村、佐用谷村、高田宿村、西野山村の14村の範囲で高田村が発足した。昭和30年（1955）には上郡町・鞍居村・船坂村および赤松村の一部と合併し、改めて上郡町が発足することにより、高田村は消滅した。

宿の地名は正保３年（1646）の正保郷帳に「宿村」として記載され、その後「高田宿村」と呼ばれるようになる。明治22年の高田村発足後に高田の呼称を除いて大字宿となり、昭和30年の町村合併により上郡町宿となり現在に至る。播磨の山陽道沿いには宿の地名をもつ地点が多く、山里宿、二木宿、小宅宿、広山宿、鵤宿など中世の史料上に見られる宿も多いことから、高田宿についても中世にさかのぼると考えられている（榎原2000）。

このように高田駅家の具体的な所在地については、中世の宿に由来する宿村の地名が注意されてきた。戦前に播磨の古代寺院の研究を進めた鎌谷木三次は、山陽道沿いに位置する寺院跡が駅家所在地と一致することを指摘している（鎌谷1942）。高田駅家の場合は、「馬場」の地名が存在することと奥井廃寺が存在することから奥井を比定地とし、駅家の置かれるような交通の要衝の条件のもと有力な豪族が存在したことが、寺院出現の背景となったことを述べている。1960年代には、瓦及びその出土地の研究とその周辺の歴史地理学的研究の発展により、駅家の所在地の特定が進んだ（今里1960、高橋1990）。その中で、宿より西に位置する神明寺所在の願栄寺付近で昭和28年頃に松岡秀夫氏が採集した瓦が、播磨国府系瓦である長坂寺式軒丸瓦と北宿式軒平瓦であることと、県道を挟んだ北側に駅田＝マヤダの転訛と考えられる「前田」という小字名の存在などから高田駅家の有力な比定地とされるにいたった。大字地名の神明寺は「じみょうじ」と読まれ、慶長国絵図では「慈明寺」と記されている。周辺で瓦が採集されている願栄寺は真宗大谷派の寺院で、寺伝によると聖徳太子建立、かつて「宇治山神明寺」と号していたとされている（私立赤穂郡教育会1973）。

山陽道の具体的な路線位置については、吉本昌弘氏が高田地域平野部の条里地割中に道代と考えられる余剰帯を見いだしたことにより現地比定の有力な手がかりが得られている（吉本1985）。

第２節　辻ヶ内遺跡の発見と事前の調査

平成19年10月の兵庫県立考古博物館開館に際し、兵庫県全域をエリアとし、県下市町との連携を図りながら進めることができる研究テーマとして「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」を選定し、その冒頭の調査事業として、県内の主要官道である山陽道・美作道・山陰道・南海道およびその支路と、駅家に比定される関連遺跡の分布調査を平成20年３月に実施した。現地で新たな成果が得られたことが多かったわけではないが、高田駅家について従来の比定地とされている神明寺遺跡とは別地点である高田宿遺跡隣接地で奈良時代の瓦を採集し、立地の面からも駅家の新たな候補地を発見することができたことは大きな成果であった。

１　分布調査

分布調査の実施においては、古代官道および駅家推定地の踏査を行って現状を把握した。同時に、当該市町教育委員会の担当者に面会して、従前の調査成果や文献資料などについて取材した。

高田駅家については高田宿遺跡付近と神明寺遺跡について踏査をおこなった。

①　高田宿遺跡（県遺跡地図番号480276）

所在地　　赤穂郡上郡町宿

調査担当者　　埋蔵文化財調査部調査第２班　主査　西口圭介・主査　篠宮　正

調査日　　平成20年３月25日（遺跡調査番号2007148）

古代山陽道が椿峠を西に向かって越え、谷が開けた場所に位置し、古代山陽道の路線にほぼ沿う県道姫路上郡線の北側に隣接し、西に向かって張り出した尾根の先端（西側）の平坦地である。北側は高田川の支流である佐用谷川が流れ、南側は一段下がっている。西向きの眺望がよい。路線の北側に面し、東側の峠に向かう谷の出口付近に位置する立地が布勢駅家（小犬丸遺跡）や野磨駅家（落地遺跡）、山陰道業鹿駅家（柴遺跡）と共通することに留意した（第２図）。

中世の遺跡として登録されている高田宿遺跡の東側隣接地にあたり、昭和47年以前の昭和40年代に圃場整備が行われた水田が広がっている。雨の後で水田に水が入っていたため詳細な範囲は把握できなかったが、畔付近で古代に位置づけられる丸瓦・平瓦と須恵器杯を採集した。遺物は耕作による撹拌により細片化していた。

②　神明寺遺跡（県遺跡地図番号480173）

所在地　　赤穂郡上郡町神明寺

調査担当者　　埋蔵文化財調査部調査第２班　主査　西口圭介・主査　篠宮　正

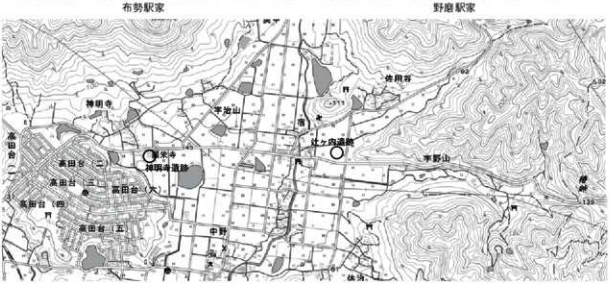
調査日　　平成20年３月25日（遺跡調査番号2007148）

南向きの緩斜面に立地し、願榮寺の境内の周囲は昭和40年代に圃場整備が行われた水田が広がっている。願榮寺の南側で丸瓦・平瓦、県道姫路上郡線の北側で平瓦・須恵器杯Bを採集した。願榮寺周縁では従前から播磨国府系の軒瓦が採集されていることから、高田駅家の比定地とされてきた。しかし古代山陽道の推定路線より約100m南に離れていることと、願榮寺境内で塔心礎とみられる石材の存在が確認されている（岸本2006）ことにより、神明寺遺跡は駅家跡よりは寺院跡である可能性が高まった。

分布調査の結果、高田宿遺跡の隣接地で古代の瓦・須恵器が採集され、立地からみても高田駅家の有力な推定地を発見することができた。この調査結果を受け、上郡町教育委員会でも改めて周辺の踏査を行ったうえで、この地点を小字地名から「辻ヶ内遺跡」（県遺跡地図番号480294）と登録した。

布勢駅家

野磨駅家



高田駅家

栗鹿駅家

第２図　駅家の立地

2　地形調査

平成29年度から開始した第Ⅳ期調査では、平成19年度に発見した辻ヶ内遺跡を対象とすることとなった。平成30年度は、現地の確認調査に先立ち、事前に地形についての検討を行うこととした。

辻ヶ内遺跡周辺では、上郡町内でいち早く昭和40年代に圃場整備が行なわれた。残念ながらこの圃場整備時の工事用の地形図は現存していない。そこで、圃場整備前に撮影された空中写真により検討を行った。

圃場整備前に撮影された空中写真は、国土地理院昭和39年撮影のものを利用した。高田盆地全体を含む範囲について、２D・３Dオルソ写真を作成し現地形との対比ができるように試みた。ただし、３Dオルソ写真については撮影高度の低いラップ写真が得られなかったことから、十分な精度は得られていない。

①条里と古代山陽道の路線

上郡町東部の高田地域は、圃場整備以前に東へ８度振る条里地割が存在していたことが空中写真により確認することができ、古くからの水田地帯であったことがわかる（第３図）。そして条里の痕跡を子細に検討すると県道姫路上郡線とその北側にかけて古代山陽道の痕跡と考えられる幅約10mの道代が存在することが指摘されている（吉本1985）。

道代が地割りとして明瞭なわけではない。水田畦畔として条里のラインが確認できるのは県道姫路上郡線の北側１町の位置と南側１町の位置で、このラインの間隔は約230mである。この間隔から２町（109m×２）の長さを引く12m程度が余ることとなる。南側１町のラインから北へ109mの位置が姫路上郡線の路線の南辺にあたり、その北側へ約12mの範囲が道代であることがわかる。

②圃場整備以前の辻ヶ内遺跡の地形

辻ヶ内遺跡で遺物が採集されたのは、県道姫路上郡線と佐用谷集落へ進入する南北路の西北に接する三筆の水田である。この水田の圃場整備前の区画は、かなり細かく分筆されていた。そのなかで、県道の北約17mの位置の東西方向の畦畔と南北路（条里ラインである）から西約80mの南北方向の畦畔は、直線的に整っているように見える（図版２）。立体的にみてもこの２つの畦畔部分が特に一段高くなっていたように見える（第４図）。

南北路と南北方向の畦畔の間隔の約80mは、布勢駅家推定地の小犬丸遺跡で検出された駅館院の一辺の長さと等しく、南北幅も北側に流れる佐用谷川までの範囲で80mの規模をちょうど納めることができる。このように、駅館院の外郭線が水田区画に残されている可能性が考えられるに至った。

また、県道北側の東西方向の畦畔は、古代山陽道の道代の北側のラインの延長上に位置している。ただし、このまま東へ延長すると丘陵に当たるため、実際の古代山陽道の路線は丘陵を避けて南側にやや振っていると考えられる。

③字名

『佐用谷村耕地切図』によると辻ヶ内遺跡の南側には「大道ノ下」、北東の谷中には「前田」と駅家に関連する可能性がある小字名が確認できる（第５図）。「大道ノ下」の地名は小犬丸遺跡付近でも確認できる地名である。「前田」は駅家推定地から北東奥の馬を飼うに適した谷地形にあり、ウマヤダから変化した地名にふさわしく思えるが、佐用谷集落の前面に位置する水田地という意味も考えられる。

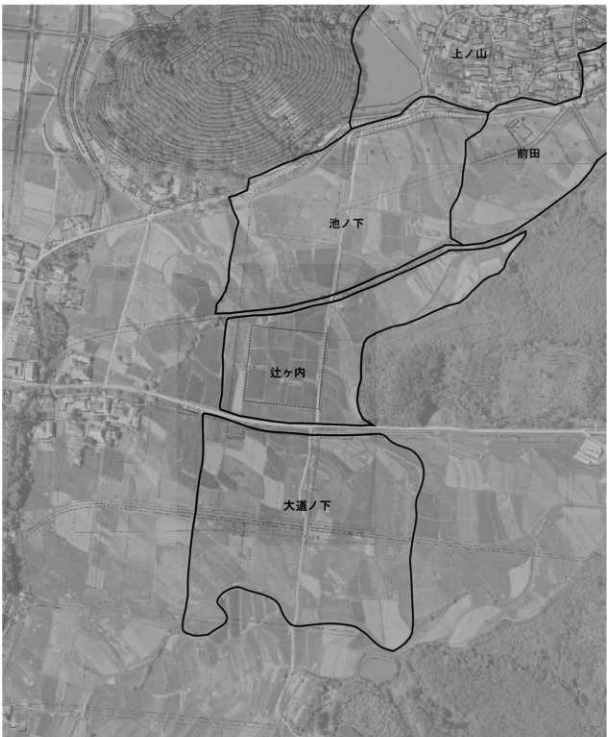
実線：条里地割　点線：方１町（109m）グリッドの補線　一点破線：駅家推定範囲　　※上が北　　縮尺 1:10000

第３図　平野部の条里と余剰帯

辻ヶ内遺跡遠景　南西から

辻ヶ内遺跡近景　南西から

第４図　辻ヶ内遺跡付近３Ｄオルソ写真



航空写真：国土地理院　昭和39年撮影　　1/4000
地図：上郡町基本都市計画図　平成９年作図※上が北

第５図　佐用谷の小字名

第３章　辻ヶ内遺跡の調査成果

第１節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

辻ヶ内遺跡は兵庫県南西部の赤穂郡上郡町佐用谷に所在する。上郡町の中心には北から南へ千種川が流れている。河口部より約15kmさかのぼった付近には広い低地が形成され、東西南北の道路・鉄道の結節点でもある現在の上郡町の市街地が広がっている。

辻ヶ内遺跡は千種川に北東方向から流れ込む支流の高田川の流域に属し、上郡町市街地より東側の丘陵を越えたところに位置している。高田川の流域は東西を丘陵で囲まれ、丘陵裾部から扇状地が広がり、南西部がすぼまることから、高田盆地と呼ばれる緩斜面から平地部からなる広い低地部が形成されている。低地部では「高田米」と呼ばれるブランド米が生産される水田が広がっている。

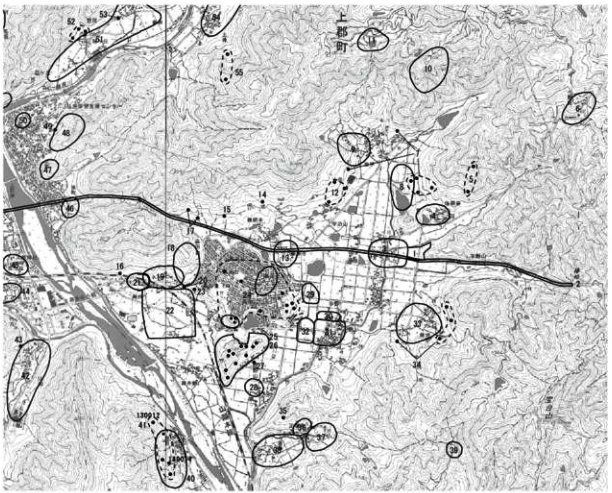
２　歴史的環境

辻ヶ内遺跡の所在する高田盆地周辺では縄文時代以降の遺跡が確認されている（第６図）。梨ノ木遺跡（30）は高田盆地の低地中央部に位置し、流木や植物種子などとともに縄文時代後期・晩期の土器、磨石・石皿などが出土している。

弥生時代には高田盆地の低地中央部の中野付近の神子田遺跡（31）などと、盆地縁辺部の山裾の佐用谷遺跡（４）・尾鼻池遺跡（８）・休治遺跡（33）や丘陵部の西野山遺跡（25）で弥生時代の遺構の検出や遺物が採集されている。古深田遺跡（32）では溝内から弥生時代中期の土器が大量に出土し、分銅形土製品とみられる破片が出土している。尾鼻池遺跡（８）では弥生時代中期から古墳時代初頭の遺跡がみつかり、竪穴住居跡や土器棺墓などが検出されている。佐用谷遺跡（４）でも佐用谷集落の西側の山裾で弥生時代中期の土器が採集されている。神子田遺跡（31）では後期の竪穴住居跡が２棟検出され、町内ではじめて発見された竪穴住居跡であることから保存され、小学校内に竪穴住居が復元されている。

古墳時代には高田盆地の南西側の丘陵部に古墳が多く築造される。中山13号墳（24）は全長約59mの前方後円墳で、前方部が撥形に開く墳形から３世紀後半の前方後円墳と考えられている。高田盆地の南西開口部の南側の丘陵上に位置する正福寺北谷田古墳（35）も全長約39mの前方部が撥形に開く前方後円墳である。中山13号墳の南側の丘陵に位置する西野山３号墳（26）は全長約40mの前方後円墳とみられている。粘土槨を埋葬施設とし、三角縁神獣鏡などが副葬され、正福寺北谷田古墳に次ぐ４世紀前半の首長墳と考えられている。中山古墳群内には13号墳のほかにも、一辺25mの方墳、木棺直葬墳や横穴式石室墳など総数15基の中期・後期の古墳が造り続けられている。６世紀後葉以降は西野山８・９号墳（26）や奥井１号墳（16）など玄室長約４.８m、奥壁幅２.６mの大型の横穴式石室が現われる。規模からみて郡域レベルの首長墓と考えられている。神明寺１号墳（14）は１辺17m程度の方墳で、列石がめぐらされている。埋葬施設は奥壁幅約１.５mの袖石が突出する「紙園塚型石室」で、被葬者は郡域レベルの首長に次ぐ階層にあたると考えられている。神明寺１号墳の西に位置する奥井７号墳（17）は玄室幅より羨道幅が広い横口式石槨である。７世紀には山陽道のルートに面して特異な構造の古墳が造られている。

古代には高田盆地付近は高田郷と呼ばれ、古代山陽道の路線が横断し、高田駅家が置かれたと考えられている。山陽道を基準した条里地割が見られ、現在も広がる水田としての土地利用が古くにさかのぼることを推定させる。奈良時代の顕著な遺跡としてはまず奥井廃寺（19）が挙げられる。奥井１号墳の麓に



1　辻ヶ内遺跡　2　古代山陽道　3　高田宿遺跡　4　佐用谷遺跡　5　佐用谷古墳群
6　小野豆遺跡　7　奥古墳群　8　尾鼻池遺跡　9　奥杓谷遺跡　10　高田城跡
11　新山寺跡　12　宇治山古墳群　13　神明寺遺跡　14　神明寺１号墳　15　神明寺２号墳
16　奥井１号墳　17　奥井古墳群　18　奥井西山遺跡　19　奥井廃寺　20　奥井瓦窯址
21　奥井谷遺跡　22　奥井遺跡　23　庵寺山古墳　24　中山古墳群　25　西野山遺跡
26　西野山古墳群　27　中山瓦窯址　28　西野山堀遺跡　29　中野山神遺跡　30　梨ノ木遺跡
31　神子田遺跡　32　古深田遺跡　33　休治遺跡　34　休治古墳群　35　正福寺北谷田古墳
36　正福寺窯址　37　正福寺南山田遺跡　38　釜島遺跡　39　山田奥窯跡　40　野田遺跡
41　野田古墳群　42　竹万山田遺跡　43　竹万山田古墳　44　竹万京免遺跡　45　竹万宮ノ前遺跡
46　東町遺跡　47　柏原城跡　48　経納山古墳　49　丸尾古墳　50　尼崎藩上郡陣屋跡
51　尾長谷中間遺跡　52　惣尻古墳群　53　尾長谷１号墳　54　尾長谷御門遺跡　55　土井古墳群

第６図　遺跡の位置図

近接して７世紀後葉に建立された寺院で、かつて塔の心礎が存在したことが知られ、塔跡の基壇が調査されている。神明寺遺跡（13）は古代山陽道の推定路線に面し、播磨国府系瓦が採集されていることから高田駅家の推定地とされてきた。その後、願栄寺の境内に心礎がみつかったことと、新たな高田駅家推定地として本書で報告する辻ヶ内遺跡（１）が発見されたことで、古代寺院跡である可能性が高まった。

中世には「宿」の地名から中世山陽道沿いの宿場町が存在したことが推定されるが、近世に西国街道が南側の現国道２号線沿いに移ることによって幹線道沿線の地位を失うこととなった。

第２節　確認調査の概要

平成30年度に行った圃場整備以前の地形の検討の結果、平成19年度に瓦が採集された姫路上郡線の北に接する現水田３筆の範囲に、駅館院の外郭線と想定できる地割りを認識できた。そこで、令和元年度からこの地点について遺跡の存否をはじめとして、圃場整備等による地形の改変状況、遺構の残存状況、遺物の包含状況などを明らかとするためにトレンチ調査を行うこととした。

１　令和元年度の調査

調査の初年度は、駅館院の外郭線の西辺と南辺と想定した部分の状況を確認することを目的として、外郭の想定線をまたぐように幅２ｍ×長さ10ｍのトレンチを、西辺のＴ１と南辺のＴ２の各辺１箇所ずつ設定した（図版２）。

重機により表土、圃場整備による盛土、圃場整備以前の耕作土を除去し、包含層の掘削及び遺構の検出は人力で行った。調査の前半は好天に恵まれたが、後半は雨が多く、掘削深度の深いＴ２の南部は、水没を繰り返したことから、壁面の崩落が著しく、観察が十分にできなかった。

検出された遺構は写真撮影を行い、設置した３級基準点を利用して実測を行った。埋め戻しは重機により、ランマーで転圧しながら行った。

調査の結果、Ｔ１では築地の基盤層と推定される黄色土の高まりと土坑状の遺構、溝状の遺構、Ｔ２では築地とみられる遺構とその内側の溝などを検出し、双方のトレンチから合わせて28ℓ入りコンテナにして37箱の遺物が出土した。遺物のほとんどは古代の瓦である。

調査箇所においては昭和40年代の圃場整備時に盛土をされた部分が多く、地形の改変はほとんど受けておらず、遺構の残存状況は良好であることが確認できた。そして想定どおりの位置で築地跡と見られる遺構が検出でき、播磨国府系の軒瓦も出土したことから高田駅家の駅館院が存在した可能性が極めて高まった。

２　令和２年度の調査

令和元年度に駅館院外郭線の西辺・南辺想定位置で築地跡とみられる遺構を確認したことから、今回は北辺の想定位置と駅館院内の南西部の状況を確認する幅２ｍ×長さ10ｍのトレンチをそれぞれに１箇所ずつ設定した（図版２）。さらにそれぞれのトレンチを部分的に拡張した。

重機により表土、圃場整備による盛土、圃場整備以前の耕作土を除去し、包含層の掘削及び遺構の検出は人力で行った。検出された遺構は写真撮影を行い、前年度に設置した３級基準点と新たに設置した３級水準点を利用して実測を行った。埋め戻しは重機により行い、ランマーで転圧しながら行った。

調査の結果、Ｔ３では圃場整備時の削平により、古代の遺構は検出されなかった。Ｔ４では建物跡や築地などの明瞭な遺構は検出されず、やや地形の低い部分に堆積した瓦溜と小さい谷地形を埋めた整地層が検出された。遺物のほとんどはＴ４からで、合わせて28ℓ入りコンテナにして26箱の遺物が出土した。遺物のほとんどは古代の瓦である。

Ｔ３を設定した北辺部はもともと地形の高い部分であったことから、圃場整備時に大きく削平を受けていることが確認された。南西部はＴ１・Ｔ２と同様に圃場整備時には盛土をされた部分が多く、遺構の残存状況は良好であると思われた。

第３節　遺構について

１　Ｔ１（図版３・写真図版４～７）

トレンチの位置

姫路上郡線の北に接する現水田３筆のうち西側の一番低い水田に位置する。この位置の圃場整備前の旧水田は東西に大きく分かれ、西側は南北の２段、東側は北から南側へ４段と細かく分かれている。トレンチは東側の北から２段目の旧水田と西側の北側の旧水田にあたる。駅館院西辺想定線の中央やや北よりの位置に設定した。

調査の概要

耕土と圃場整備時の盛土を除去すると、調査区中央付近で圃場整備前の畦畔の位置と重なる築地の基盤部と、その東側に土坑状の落ち込み（ＳＸ01）が検出された。畦畔の西側は30cmほど１段下がった圃場整備前の耕作地で、西側の旧水田を東に広げる前の段階（７～９層）と広げた後の段階（４～６層）に分かれる。その耕作土を除去すると浅い溝状の落ち込み（ＳＸ02）が検出された。

築地

旧水田の畦畔の位置で、南北方向に上面幅１ｍの黄色シルト系の土（14層）で10cm程度盛り上げられている部分が検出され、南端部では幅2.4ｍに広がっている。南壁際ではピットが検出されているが、上面は黄色土で埋め戻されている。畦畔西側の裾は長50cm以下の礫で押さえられているが、この礫は圃場整備前の耕土で取り巻かれていることから、西側の旧水田を東に広げた後の段階ものと考えられ、盛土はある程度削り取られているだろう。

黄色土の盛土は旧水田の畦畔とするには幅が広く、ＳＸ01の瓦層に覆われていることから瓦廃棄以前の遺構の一部で、西辺築地の基礎部分が残存した可能性が高いと考える。

ＳＸ01

ＳＸ01は長さ3.0m以上、幅1.7m以上、深さ50cmの東西方向に長い土坑状の落ち込みである。築地基盤盛土を抉り込むように設けられている。埋土には瓦・礫を多く含み、中層以下で土師器甕や製塩土器の破片が多く見られる。最下層で瓦は出土しておらず、炭を多く含んでいる。ほとんど埋没した上面（上層）で瓦が大量に出土している。出土瓦には古大内式軒丸瓦（Ｔ１）、北宿式軒平瓦（Ｔ４）を含んでいる。出土土器は須恵器杯Ｂ（１・６）・杯Ｇ（２）・皿（４）・盤（３）・蓋（５）、土師器甕（６）、製塩土器（７・８）などがある。

ＳＸ02

ＳＸ02は最大幅2.2ｍの浅い溝状の落ち込みである。深さは20cmである。東半部の上面には礫や瓦や須恵器杯Ｂ・蓋・壺の破片を含むバラス層（11層）がある。バラス層下の埋土から遺物は出土していない。西辺築地外側の排水溝の可能性があり、埋積後はバラスを敷いて犬走り状に利用されたことが考えられる。

２　Ｔ２（図版４・写真図版８～11）

トレンチの位置

姫路上郡線の北に接する現水田３筆のうち中央の水田に位置する。この位置の圃場整備前の旧水田は南北に大きく４段に分かれている。各段は東西に分かれた部分がある。トレンチは北から３段目から４断目の旧水田にかかる、駅館院南辺想定線の中央よりやや西に設定した。

調査の概要

耕土と圃場整備時の盛土（3・5層）は圃場整備以前の耕作土（6 ～ 9層）の上を厚く覆っている。圃場整備以前の耕作地では調査区中央付近で段差が確認され、その耕作土を除くと段差の北側では上面を削平された築地とその北側で瓦溜（ＳＸ03）を検出した。段差の南側は耕作土（9 ～ 12層）が厚く堆積し、徐々にかさ上げされていったことが分かる。耕作土の最下層からは須恵器杯・椀、土師器甕、弥生土器甕の破片が出土している。その下層には礫や瓦、平安中期頃の須恵器椀（13）を含む層（13層）が堆積する。この層の性格は明らかではないが、耕作地直前の整地層と考えておく。この整地層を取り除くと築地掘部に東西方向の石列が表れた。石列からは南に向かって緩やかに高まっているようにみられた。古代山陽道の路面もしくは広場状に拡幅された部分の可能性があるが、壁面の崩落により十分に観察はできなかった。

築地

築地は上面幅１ｍで、基底部幅は3.5ｍである。最下部は黄色シルト系の土、その上層は小礫混じりの黄灰色土で盛り上げられている。残存高は40㎝である。人為的な盛土であり、北側に状態の良い瓦溜が存在することから築地と考えられる。明瞭な版築が確認されないことは落地遺跡と類似している。

ＳＸ03

ＳＸ03は築地北側の瓦溜で、調査区北端までひろがっている。築地寄りの部分（瓦群Ａ）とその北側の部分（瓦群Ｂ）に分かれる。瓦群Ａは築地北側の斜面に沿って出土し、瓦の残存状況も比較的良好で、最下層から鬼瓦（Ｔ50）が出土している。須恵器杯Ｂ（11）・椀（12）があり、椀は平安中期頃のものである。瓦群Ｂは北端の褐色土の包含層（14層）中に瓦を多く含む部分である。瓦群Ａと比べて瓦は細かく砕けている。これらの瓦を取り除くと深さ20㎝程度の溝とその北側からピットが検出された。

石列

石列は長60㎝以下の礫を東西に並べているが、築地ラインより東側をやや南に振っている。東へ延長すると、東側の丘陵の山裾に向かっているようにみえる。築地最下部の黄色土層が石列まで及んでいることから築地南側の裾押さえのために置かれたものと考えられる。

３　Ｔ３（図版５・写真図版12・13）

トレンチの位置

姫路上郡線の北に接する現水田３筆のうち西側の一番低い水田に位置する。Ｔ２で検出された築地の北80ｍの北辺想定線をまたぐ位置に南北方向のトレンチを設定した。東側の列の北端の旧水田にあたる。トレンチ南端部に遺構状の窪みが認められたことから、幅１ｍで西壁を起点に東西に長さ３ｍずつ拡張した。拡張区の西部は西辺築地の想定線をまたいでいる。

調査の概要

耕土を除去すると、圃場整備による踏み込みと思われる凹凸があるものの、基本的に黄色シルト系の基盤土（10層）が現れる。北端部は近世以降の佐用川の土石流（９層）により削り取られ、礫層が堆積している。その中央に位置する石列は圃場整備前の耕作地の段部分に位置し、石列の北側は整地がなされている（６層）。土石流の礫層と石列の裏込から近世以降の施釉陶器（14・15）が出土している。土石流範囲の南端付近が北辺築地の想定線であるが、その痕跡は確認されなかった。

拡張部の東半は表土下に土石流の堆積と思われる礫層が薄く認められた。西側では圃場整備前の耕作

地の段が認められ、Ｔ１と同様に畔の下を押さえる石列が確認された。耕作地の段差は20cm弱である。耕作地の段差付近が西辺築地の想定線であるが、その痕跡は確認されなかった。

北部はもともと地形が最も高かったことから、圃場整備時に大きく削平を受けたと推定される。佐用川に近接していることから土石流の影響を受けやすい場所であったようである。明瞭な遺構は検出されず、築地などの古代の遺構の存在は確認することができなかった。

４　Ｔ４（図版６・写真図版14～18）

トレンチの位置

姫路上郡線の北に接する現水田３筆のうち西側の一番低い水田に位置する。Ｔ１の約20m南側で、駅館院内部の状況を確認することを目的とし、西脇殿のような建物跡の存在を想定してトレンチを設定した。東西に大きく分かれる旧水田の東列の北から３番目の区画にあたる。西側は西辺築地の想定線と西列旧水田の状況を確認することを目的として幅１m、長さ５mのトレンチを延長した。

調査の概要

圃場整備時の盛土（４層）下は圃場整備前の耕土・床土は除去されているものの、包含層（14層）と土壙化層（15層）が残っている部分が多かった。

東端部は南北方向の小規模な溝ＳＤ01より東側が10cm程度高く平坦な面をなしている。この部分では東端部で焼土が確認された以外は明瞭な遺構は確認できなかった。ＳＤ01より東1.5mの北壁沿いで石材が検出されたが、長30cm程度と小さく礎石に関連する石材かは判別がつかなかった。平坦な高まりであることから建物基壇の可能性はあるが、礎石の据え穴などの柱に関する遺構を確認することはできなかった。

西部では平坦な敷地を造成する状況が確認された。東端部と同レベルの高さで、基盤土が高まりをみせている。その最上層（18層）はややくすんだ黄色土で盛土の可能性も考えらえる。この高まりの部分は西辺築地の想定ラインに位置するが、築地の痕跡は確認されなかった。その東側は谷状に窪んだ部分を礫が含まれた暗灰色の土（16・17層）で埋め、整地をおこなっていた。整地土には瓦が含まれず、須恵器・土師器の細片が出土している。

西端部は圃場整備前の耕作地の段差で、約70cmの比高差がある。圃場整備前の耕土下で水分の湧出がみられだしたので、以下の掘削は行わなかった。

ＳＤ01・ＳＫ01・ＳＫ02

ＳＤ01は幅50cm程度の南北方向の溝である。東側の立ち上がりはほとんどなく、中央付近で西側へ浅いくぼみが連なって水路状に延びている（ＳＫ01・02）。ＳＤ01南半とＳＫ01・02部分は細かく砕かれた瓦や礫で埋められていた。

ＳＸ04

中央付近のくぼみに瓦などの遺物が溜まった瓦溜である。褐色土の包含層（14層）の遺物の集中部で、駅家廃絶後の堆積層と考えられる。出土遺物は瓦が多いが、須恵器甕、製塩土器（18～21）が含まれている。また長坂寺式軒丸瓦（Ｔ３）や須恵器壺（24）・杯Ｂ（26）、製塩土器（25・29）もほぼ同位置の包含層から出土したものである。

第４節　遺物について

１　土器・土製品（図版７・８、写真図版20・21）

１～10はＴ１から出土した。１～３はSX01瓦層で発見された須恵器である。１は杯Bである。高台のナデが十分ではなく、高台に焼成前あるいは焼成時にできたヒビ割れが目立つ。底部はロクロ右回転のヘラ切りである。２は丸底の杯である。口縁部は強くなでられ、やや屈曲する。３は盤の底部と思われ、外面に５cm以上の細かいミガキを施す。内面は不定方向のナデを施す。４はSX01上層出土の須恵器杯である。全体にロクロ右回転のナデを施す。５はSX01中層出土の須恵器蓋である。天井部に自然釉が多量に付着し、内面は不定方向のナデで調整している。６はSX01下層出土の須恵器杯Bである。器壁は薄く高台も細い。体部下半に指を添えた痕が残る。７はSX01南西部から発見された土師器甕である。内外面にハケ目がある。８・９はSX01から出土した製塩土器である。８は内面の口縁部～体部にかけて非常に細かい布目圧痕が薄く残る。口縁部を工具で調整した可能性がある。９は手捏ねの製塩土器で口縁部に指頭痕が残る。10はＴ１包含層から出土した、かえりのない須恵器杯蓋である。天井部がやや厚く硬質でやや重い。

11～13はＴ２で見つかった土器である。11はSX03上層から出土した須恵器杯である。底部はロクロ右回転のやや雑なヘラ切りである。12はSX03の瓦群から見つかった須恵器椀で、底部はロクロ右回転の糸切り高台である。13はSX03の水田土壌から出土した糸切り底の小片の須恵器椀である。

14～16はＴ３出土の土器である。14は北側石列裏込めから見つかった近世以降の施釉陶器の皿である。内面~外面口縁部まで灰色の釉が施されている。内面に細かい貫入が入っている。15は北側砂礫層から発見された近世以降の施釉陶器の蓋である。天井部の端まで茶褐色の釉が施されている。16は包含層から出土した杯Ｈである。欠損しているもののかえりは短く、浅い器形と思われる。体部~底部にかけてロクロ左回転のヘラケズリを施す。

17～30はＴ４から出土した遺物である。17はSD01のSK01から発見された須恵器蓋である。天井部はロクロ右回転でヘラケズリを施す。かえりの部分が鉤状になっている。残存率が低いため図示しなかったが、同じくSK01からは甕もしくは横瓶の胴部～底とみられる破片も発見されている。18～21はSX04で見つかった製塩土器である。18は手捏ねで外面口縁部をナデて丸く整えている。19も手捏ねで外面を強くナデあげて調整している。胎土に植物片を混ぜこんでいる可能性がある。20は内面を下から上に向かってなで、口縁部を丸くおさめている。21は手捏ねで口縁部は厚く、丸くおさめている。

22～30は包含層出土の遺物である。22は緑釉陶器である。見込み中心付近に円形の１本の沈線がある。釉は薄く明るいオリーブ色で、全面に施釉されている。右回転のロクロで高台がケズリ出されている。23は須恵器の蓋である。ヘラケズリの痕跡はナデ消されている。24は須恵器長頸壺の頸部である。内面上部にやや多くの降灰、外面に少しの降灰がある。25は製塩土器である。内面に非常に薄い布目痕が残る。外面を工具で調整しており、口縁部を内側に向けてケズリ整えている。26は須恵器杯Bである。火襷が内面体部及び外面口縁部から底部にかけて残る。底部はロクロ右回転のヘラ切りである。27は須恵器椀である。口縁部にかけて直線的に開く。口縁部に強いナデを施す。28は須恵器皿である。内面がすり減っており、転用硯の可能性がある。29は製塩土器である。胎土への砂の混ぜ込みは少なく、粘土紐の輪積み痕が確認できる。内外面に工具を使い少し調整している。外面・口縁部に指頭痕があり、やや尖り気味になで、押さえている。30は不明土製品である。底部は平らに調整されている。

そのほか細片のため図示できなかったが、トレンチ４の包含層から、赤彩の施された土師器杯の口縁

部、同じく赤彩の施された土師器杯の底部が見つかっている。さらに、須恵器杯Aの底部3点が出土しており、そのうち1点は内面がなめらかに摩耗しているため、転用硯であると思われる。

2　瓦

今回の調査ではコンテナ約60箱の瓦が出土している。瓦溜から出土したものが非常に多い。出土瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦が認められた。出土した瓦については出土遺構・層位ごとに数量を重量で計測した。総重量は約550kgで、平瓦が約400kg、丸瓦が約100kgである。播磨国府系軒瓦の型式名は今里1992により、平瓦は凸面のタタキ板の文様の種類によって分類した。

①軒丸瓦（図版9、写真図版22）　T1 ～ 3

軒丸瓦は3点出土している。T1は瓦当文様が単弁十三葉蓮華文である。中房は欠損が多いが、連子が1＋5であることから、古大内式Ⅱ型と見られる。瓦当裏面はヘラケズリが施されている。焼成は軟質で、胎土に含まれる砂粒は多く、白色砂粒が目立つ。

T2は連弁と中房の一部しか残っていない。中房が突出せず、外縁が突線のみで表現されていることから、単弁十六葉蓮華文の長坂寺式Ⅰ型と考えられる。焼成は軟質で、胎土に含まれる砂粒は多く、白色砂粒が目立つ。瓦当裏面はヘラケズリが施されているようである。T3は長坂寺式と考えられるが、外縁から連弁の端までしか残存しないため細別は不明である。焼成は軟質で、胎土に含まれる砂粒は多い。

②軒平瓦（図版9、写真図版22）　T4

軒平瓦は1点出土している。T4は均整唐草文と考えられ、外区の珠文帯をもつ。向かって右側の唐草の第4・5葉付近が残り、主葉先端の蕾状表現の形状や各葉の位置関係から、北宿式Ⅰ型と考えられる。凹面側周縁の外側面に笵の痕跡が認められる。顎部形態は、曲線顎Ⅱで、顎面は剥離が多くはっきりしないが、幅は約3cm程度である。平瓦部凸面はヘラケズリが、側面、凹面側面縁、瓦当面寄りの凹面はヘラケズリナデが施されている。凹面は粗い布目が残り、部分的にナデが施されている。凹面側縁の瓦当面から約6cmの位置に棒状圧痕が認められる。焼成はやや軟質で、胎土に含まれる砂粒は多く、長2 ～ 0.5cmぐらいの粒径の大きい石も含まれる。

③丸瓦（図版9 ～ 12、写真図版22 ～ 24）　T5 ～ 14

丸瓦は平瓦に比べて少なく、全形を知りうる個体も存在しない。玉縁式のものがほとんどと思われるが、T13・14は行基式と見られる。玉縁式のものはT12を除けば焼成は軟質で、T6 ～ 8・10・11は胎土に含まれる白色砂粒が顕著である。

T5 ～ 8は玉縁部が残存する。丸瓦部凹面側縁は面取りされている。T5は玉縁部凹面に布目の縦筋痕跡が比較的明瞭であるが、T6 ～ 8では不明瞭で、T8は糸切痕が明瞭である。T5の丸瓦部外面にはわずかに縦方向の縄タタキ痕が残っている。

T9 ～ 12は丸瓦部の端部が残存する。丸瓦部凹面側縁は面取りされ、T10・12の丸瓦部凹面側端縁はわずかに面取りされている。T9・10・12の丸瓦部凹面には糸切痕が残る。

T13・14は行基式と見られる。焼成はやや軟質で、胎土に灰色の砂粒が顕著に含まれている。凸面はナデが施されるが、縦方向の縄目痕を残す。T14の凸面には縦方向、横方向、V字型などの線刻が施さ

れている。凹面は布目痕（T14は磨滅か）で、凹面が側縁は面取りされている。

④平瓦

今回の調査では多量の平瓦が出土している。凸面のタタキ目の種類により分類し、重量計測時後に細別したものは小文字のアルファベットを付して区別した（第７図）。

Ｈ１類（図版13、写真図版24） T15 ～ 18

Ｈ１類は、凸面に縦長長方形格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は縦７㎜前後、横３㎜である。凹面は布目と糸切痕が残っている。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁を１回削る。端部の調整は端面のケズリの後、凹面側端縁を削る。T17は隅が切り落とされている。

厚さは１.75 ～ ２.５cmである。胎土には細かい白色砂粒が含まれている。焼成は比較的良好である。

Ｈ２類（図版14・15、写真図版25・26） T19 ～ 23

Ｈ２類は、凸面に横長斜格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は１cm前後、高さ８㎜前後である。凹面は布目が残り、T19には布端が認められる。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁を１回削る。端部の調整は端面のケズリの後、凹面側端縁を削る。T22・23は隅が切り落とされている。

厚さは１.85 ～ ２.５cmである。胎土には細かい白色砂粒が含まれている。焼成が硬質なもの（T19・20）とやや軟質なもの（T21 ～ 23）がある。

Ｈ３類（図版15・16、写真図版26） T24 ～ 26

Ｈ３類は、凸面に横長斜格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は３cm前後、高さ2.4cm前後である。タタキ板の幅内で格子の両端が交差しているかは確認できない。凹面は布目が残り、部分的にナデが施されている。

側面の調整は丸味をもち、ナデが施されるもの（T24）と布目が残るもの（T25）がある。凸面側縁を大きく面取りしている。端部の端縁に面取りは認められない。

厚さは2.4cm前後である。胎土には白色砂粒が多く含まれ、焼成はやや軟質である。

Ｈ４類（図版16、写真図版26） T27・28

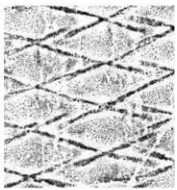
Ｈ４類は、凸面に横長斜格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は3.2 ～ 2.7cm程度とみられるが、文様が連続している部分があまりなく、タタキ板の幅内で格子の両端が交差しているかも確認できない。凹面は布目が残る。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁を２回削っている。端面はケズリで、凹面の端縁から２～ ３cmの幅もケズリが施されている。T27の端面では接合痕が明瞭で、

厚さは3.05 ～ 2.5cmと厚手で、粘土の接合痕が比較的明瞭に認められることから、成形台上で粘土板を重ねて成形したものと思われる。胎土に細かい白色砂粒を含み、焼成はやや軟質である。

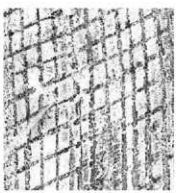
H１類

H２類

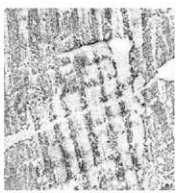


H３類

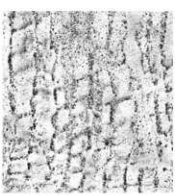
H４類



H５a類

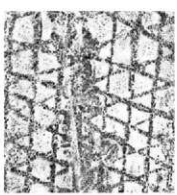


H５b類

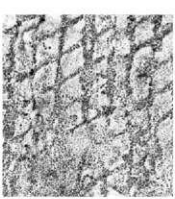


H５c類

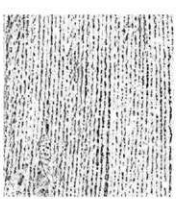
H６a類



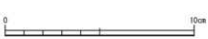
H６b類



H６c類



H７類



第７図　タタキ目の分類

H５類（図版17、写真図版27） T29 ～ 32

Ｈ５類は、凸面に右上がりの偏斜格子のタタキ目をもつものである。

Ｈ５ａ類（T29・30）は、タタキ目の幅が７㎜前後、高さ1.4cm前後で、右上がりの角度が急である。凹面は布目が残り、部分的にナデが施されている。厚さは2.0cm前後で、胎土に白色砂粒を多く含み、焼成も比較的良好である。T29は側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁をナデている。端面はケズリで、凹面の端縁から3.5cmの幅もケズリが施されている。T30は側面の調整は側面のケズリの後、凹凸両面側の側縁を面取りしている。端面はケズリである。T30の凹面の布目は側縁端まで及んでいない。

Ｈ５ｂ類（T31）は、タタキ目の縦筋は明瞭であるが、横筋は不明瞭で、ナデが施されている部分もある。タタキ目の幅が９㎜前後、高さ９㎜前後で、右上がりの角度が緩やかである。凹面の布目はかなりナデ消されている。側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁を面取りしている。端面はケズリの後、凹面側端縁を面取りしている。厚さは2.6cmで、胎土に白色砂粒を含み、焼成も良好である。

Ｈ５ｃ類（T32）は、タタキ目の縦筋は明瞭であるが、横筋は不明瞭である。タタキ目の幅が６～10㎜と不揃いで、高さ８ ～ 10㎜前後で、右上がりの角度が緩やかである。凹面は布目が残る。側面の調整は側面のケズリのみである。端面はケズリの後、凹面側端縁を面取りしている。厚さは2.45cmで、胎土に白色砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

H６類（図版18 ～ 20、写真図版28・29） T33 ～ 38

Ｈ６類は、凸面に縦方向の条線に斜め方向の条線を加えたタタキ目をもつものである。斜め方向の条線の配置で細分される。

Ｈ６ａ類（T33 ～ 35）は、縦方向の条線の幅が1.4cm前後、斜格子状の条線は一辺1.5cm前後、高さ1.4cm前後である。タタキ板の摩耗や叩き方の変化により文様が部分的にしか確認できないものが多い。凹面は布目が残り、部分的にナデが施されている。厚さは2.25 ～ 2.5cm前後で、胎土に白色砂粒をふくむ。焼成はT33が軟質、T34・35が硬質である。側面の調整は側面のケズリの後、凹面側の側縁を面取りするもの（T33・34）、凹面側の側縁を面取りしないもの（T35）がある。端面はケズリで、凹面側端縁を面取りするもの（T33・35）、凹面側端縁を面取りしないもの（T34）がある。H33の広端の隅は切り落とされている。

Ｈ６ｂ類（T36）は、縦方向の条線の幅が1.3cm前後、斜格子状の条線は一辺1.5 ～ 2.5cm、高さ1.5cm程度とa類と比べると間隔が大きい。凹面の布目は磨滅しているが、端縁・側縁の内側に布端が確認できる。側面の調整は側面のケズリの後、凹面側の側縁を面取りする。端面はケズリで、凹面側端縁を面取りしない。厚さは2.15cmで、胎土に白色砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

Ｈ６ｃ類（T37・38）は、右上がりの偏斜格子に、右下がりの条線がまばらに加えられたように見えるものである。タタキ板の摩耗により条線が消えてしまった部分があるかもしれない。縦方向の条線の幅が1.0 ～ 1.5cm、右上がりの条線は一辺1.2 ～ 1.7cmである。T37は磨滅して凹面の布目はほとんど残っていないが、糸切痕は確認できる。側面の調整は側面のケズリが施されるが、側縁の面取りは磨滅の為不明瞭である。端面はケズリで、凹面側端縁を面取りする。厚さは2.15cmで、胎土に砂粒を多く含み、焼成は軟質である。T38は凸面に布目が残り、部分的にナデが施されている。側面の調整は側面のケズリの後、凹面側側縁が面取りされている。端面はケズリで、凹面側端縁を面取りされている。広端部の隅が切り落とされている。厚さは2.15cmで、胎土に砂粒を含み、焼成は硬質である。

H７類（図版21・22、写真図版29・30）　T39～43

Ｈ７類は、縄目のタタキ目をもつものである。縄目の細かさに差異があるが細別は行っていない。凹面は布目が残り、部分的にナデが施されているもの（T42）がある。側面及び側縁は布目痕（T39）、もしくはナデ調整（T40～43）であるが、いずれも凸面側縁を幅広に削っていることが特徴である。端部の調整は端面のケズリで、T39のみ凹面を端縁から２～３cmの幅でケズリが施されている。厚さは1.75～2.65cmで、胎土は比較的砂粒が少ないもの（T39・41）と大粒の砂粒を含むもの（T40・42・43）がある。焼成はT40が硬質である以外は軟質である。

H８類（図版23～24、写真図版30・31）　T44～47

Ｈ８類は、凸面にナデが施されているものである。タタキ目が確認できるが、文様が確認できないものも含んでいる。凹面は布目が残り、部分的にナデがほどこされるもの（T44・46・47）がある。T47は側縁の内側に布端が認められる。側面の調整は側面のケズリの後、凹面側側縁を面取りするもの（T45・46）と凹面側側縁をナデるもの（T44・47）がある。端部の調整は端面のケズリのみのもの（T44・46）凹面側端縁を面取りするもの（T45・47）がある。厚さは2.35cm～2.7cmで、胎土に白色砂粒を多く含み、焼成はT44～46が軟質で、T47が硬質である。

⑤鬚斗瓦（図版24、写真図版32）　T48・49

幅12.8cmの鬚斗瓦である。いずれも凸面にＨ６類のタタキ目が残り、T48はＨ６a類、T49はＨ６ｂ類のタタキ目である。凹面は布目が残り、端縁の内側に布端が認められる。側面・端面の調整はケズリのみで、縁部の面取りは認められない。

厚さは２.６cm前後で、胎土に白色砂粒を含み、焼成はT48が軟質・T49が硬質である。

⑥鬼瓦（図版25、写真図版32）　T50・51

T50は表面がほぼ完存しているが、裏面は３分の１ほど剥離している。土圧によるひずみのため、接合面が整合しない部分がある。幅28.8cm、高さ26.8cm、厚さ６.25cmである。刳り込みは幅16.8cm、高さ7.9cmである。表面に鍛状の粘土の接合痕とみられる痕跡があり、文様が見にくい部分がある。目玉の内側寄りに３か所の突出部があり、瞳が一段飛び出している。目の周りは隈取がめぐる。鼻は丸い小鼻が横に並び、鼻孔はあけられていない。その上に鼻背・鼻根・眉間の盛り上がりが連なっている。両目の上には一連につながる眉がかぶさる。目の下には頬が高く盛り上がり、鼻の下は口が開いているが、刳り込みにより下顎の表現は削られている。口内はかろうじて牙の表現は確認できるが、裂れ目と鍛状の接合痕により歯の表現は不明瞭である。頭には２連の蕨手状の巻き毛が外向きに開き、頬の下には２連の蕨手状の巻き毛が上向きに表現されている。周囲には細い周縁が付いているが、下端には付いていない。播磨国府系Ｉ型の鬼瓦に似るが、細部の表現が異なっている。胎土には大粒の砂粒を多く含み、焼成は軟質である。粘土の継ぎ目で剥離した部分が多く、表側と裏側の間で大きく分かれている。

T51は表面が目の隈の下と頬の一部しか残っていない。穿孔は鼻孔とみられる。裏面は平坦であるが、厚みが薄いことから剥離面と考えられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

第４章　まとめ

第１節　辻ヶ内遺跡出土瓦の検討

１　瓦の出土量

今回出土した瓦については重量による計数作業をおこなった。総重量は約550kgで、削平により古代の遺構が検出されなかったＴ３を除けば１㎡あたり８kg前後の瓦が出土している。瓦の種別ごとにみると平瓦が圧倒的に多く、丸瓦がそれに次いでいる。軒瓦・熨斗瓦は破片の部位によっては平瓦・丸瓦に含まれるため少なめの値となっているだろう。平瓦・丸瓦の個体数を小犬丸遺跡（兵庫県教育委員会1987）出土の完形個体の平瓦・丸瓦の重量から仮に算出してみると平瓦が130個体、丸瓦が43個体となる。丸瓦１個体に対して平瓦が３個体の割合となり、計算上の使用比率は丸瓦１個体に対して平瓦が２個体以下と考えられることから、丸瓦の出土比率が低い。上に載る丸瓦のほうが先に脱落し離れた場所に片づけられたことが考えられようか。小犬丸中谷廃寺では検出された長さ21ｍ分の築地に使用された瓦の枚数を復元しているが、丸瓦を1245個、平瓦を1836個としている（岩戸2006）。今回調査を行ったトレンチ幅２ｍ分に換算すると丸瓦119個、平瓦175個となり、Ｔ１・Ｔ２の出土瓦を築地所用の瓦と考えると使用された丸瓦の１割弱、平瓦の約２～３割程度が残っていると推定される。

表２　出土瓦の重量と個体数

地区ごとの重量　単位g

地区	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	熨斗瓦	鬼瓦	細片	合計	g/1㎡
T1	120432	24749	3297	620	2352		3122	154572	7728.6
T2	125677	31297	3570	190	1405	5045	4722	171906	8595.3
T3	3006	270					512	3788	145.7
T4	154398	46858		109	711		19821	221897	8875.9
合計	403513	103174	6867	919	4468	5045	28177	552163	6067.7
割合	73.1	18.7	1.2	0.2	0.8	0.9	5.1		

平瓦・丸瓦の個体数

地区	平瓦	丸瓦	平瓦/丸瓦
T1	38.8	10.3	3.8
T2	40.5	13.0	3.1
T3	1.0	0.1	8.6
T4	49.8	19.5	2.6
合計	130.2	43.0	3.0

※平瓦１点を3.1kg、丸瓦１点を2.4kgと仮定する。
小犬丸遺跡出土の平瓦５点・丸瓦３点の重量の平均値より算出
辻ヶ内遺跡出土の瓦の方がかなり厚いため、平瓦で4kg程度となる可能性があり、個体数はもうすこし少ないと思われる。

２　平瓦のタタキ目について

平瓦は凸面に残るタタキ目の痕跡により分類をおこなった。長方形格子のＨ１類、横長斜格子のＨ２～４類、偏斜格子のＨ５ａ～ｃ類、特殊斜格子と呼ぶ、縦方向の条線に交差する斜め方向の条線を加えたＨ６ａ～ｃ類、縄目のＨ７類、ナデが施されたＨ８類に分け、約25％は細片や摩滅により分類不能なため不明とした。

特殊斜格子のＨ６類、偏斜格子のＨ５類がそれぞれ２割以上を占め、ナデが施されたＨ８類、長方形格子のＨ１類、横長斜格子のＨ２類が１割台と続き、縄目のＨ７類は１割弱と少ない。Ｈ６類はどの地区でも一定に多く、熨斗瓦のタタキ目にも使用されている。

表3　平瓦のタタキ目の分類別数量

重量　単位g

地区	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8
T1	17058	10697	1480	3055	21177	24199	4895	12592
T2	13694	14847			15004	26669	13003	17685
T3		971		182	541	642	128	
T4	8040	4632	10740		23488	25326	10832	18203
合計	38792	31147	12220	3237	60210	76836	28858	48480

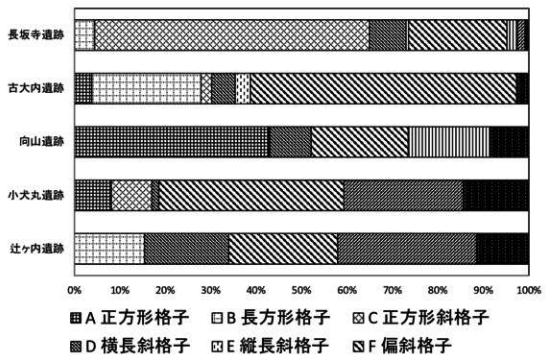
比率　単位%

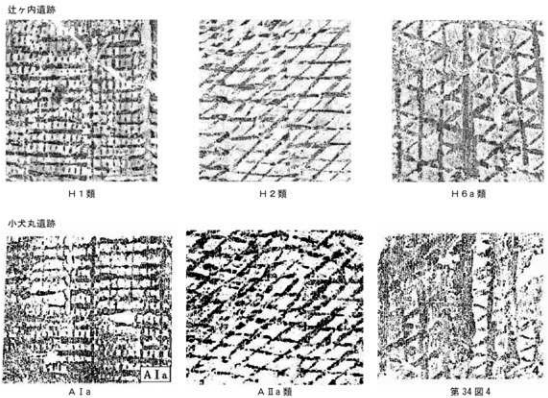
地区	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8
T1	17.9	11.2	1.6	3.2	22.3	25.4	5.1	13.2
T2	13.6	14.7	0.0	0.0	14.9	26.4	12.9	17.5
T3	0.0	39.4	0.0	7.4	22.0	26.1	5.2	0.0
T4	7.9	4.6	10.6	0.0	23.2	25.0	10.7	18.0
合計	12.9	10.4	4.1	1.1	20.1	25.6	9.6	16.2

表4　平瓦のタタキ目の分類別比率

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
	正方形格子	長方形格子	正方形斜格子	横長斜格子	縦長斜格子	偏斜格子	平行	特殊・その他	縄目
辻ヶ内遺跡		15.4		18.5		24.0		30.6	11.5
小犬丸遺跡	8.1		8.9	1.6		40.7		26.2	14.5
向山遺跡	42.9		0.2	9.1		21.4	18.2		8.4
古大内遺跡	3.8	24.0	2.3	5.2	3.3	58.6			2.7
長坂寺遺跡	0.1	4.4	60.5	8.0	0.6	21.7	2.2	1.7	0.9

※長坂寺遺跡・古大内遺跡・辻ヶ内遺跡は重量比、向山遺跡・小犬丸遺跡は個体数比





第８図　類似するタタキ目

他の駅家遺跡とナデが施されタタキ目が確認できないものを除いて主要なタタキ目の比率を比べてみると、長坂寺遺跡では正方形斜格子が60.５％、偏斜格子が21.７％、古大内遺跡では偏斜格子が58.６％、長方形格子が24.０％、向山遺跡では正方形格子が42.９％、偏斜格子が21.４％、小犬丸遺跡では偏斜格子が40.７％、特殊斜格子が26.２％を占めている（兵庫県立考古博物館2010・2013・2017、山根1986）。偏斜格子タタキは全ての遺跡である程度の割合用いられているが、その他の型式は各遺跡でおおむね異なっている。辻ヶ内遺跡では特殊斜格子が多いことが特出され、特殊斜格子と偏斜格子とでかなりの比率を占めている点では小犬丸遺跡と類似している。小犬丸遺跡出土の長方形格子（ＡⅠａ類）、横長斜格子（ＡⅡａ類）や特殊斜格子（第34図４）に類似するタタキ目が認められ、同一原体かは確認できないものの関連が深いように思われる。

３　軒瓦について

今回出土した軒瓦は古大内式軒丸瓦１点、長坂寺式軒丸瓦２点、北宿式軒平瓦１点で、いずれも播磨国府系軒瓦とされているものである。

古大内式軒丸瓦（Ｔ１）は、文様が単弁十三葉蓮華文で中房の蓮子が１＋５のⅡ型である。落地遺跡では軒丸瓦のうち古大内式が86％を占め、Ⅰ型とⅡ型の比率は４対３である。小犬丸遺跡では古大内式が９割以上を占め、そのほとんどがⅡ型とされている。Ⅱ型はⅠ型と比べて後出的なものとされている。

長坂寺式軒丸瓦は、文様が単弁十六葉蓮華文で、Ｔ２は中房が突出しないⅠ型であるが、Ｔ３は細別できない。Ⅰ型は向山遺跡や長坂寺遺跡では主体を占める型式である可能性が高く、落地遺跡や小犬丸遺跡では出土数の少ない型式である。なおⅡ型は神明寺遺跡でしか出土していない。文様的には複弁八葉蓮華文のⅡ型のほうが単弁十六葉蓮華文のⅠ型より古く見える。

播磨国分寺跡

長坂寺式Ⅰ型

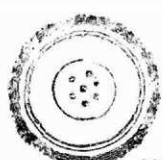
長坂寺式

神明寺遺跡

長坂寺式Ⅱ型

北宿式Ⅰ型

北宿遺跡

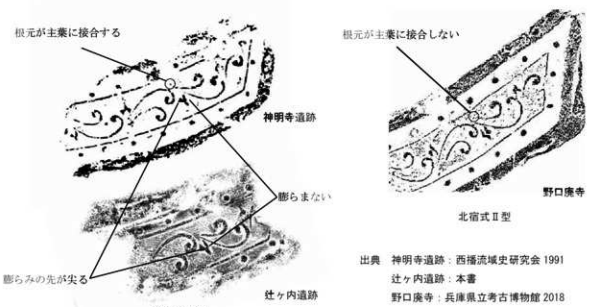


北宿式

北宿式Ⅱ型

出典　播磨国分寺跡：姫路市史編集専門委員会 2010、神明寺遺跡：西播流域史研究会 1991、北宿遺跡：今里 1992

第９図　長坂寺式・北宿式の軒瓦



出典　神明寺遺跡：西播流域史研究会 1991
辻ヶ内遺跡：本書
野口廃寺：兵庫県立考古博物館 2018

第１０図　北宿式軒平瓦の細部

北宿式軒平瓦（Ｔ４）はⅠ型とされるものである。Ⅰ型とⅡ型は文様構成や珠文の配置がほぼ同じであるが、主葉先端の蕾状表現の形状や各葉の位置関係から区別できる。Ⅰ型は辻ヶ内遺跡以外に神明寺遺跡と長尾廃寺で出土するのみで、現状では千種川流域に限られている。Ⅱ型は北宿遺跡、長坂寺遺跡のほか、播磨国分尼寺跡、金剛山廃寺、市之郷廃寺、野口廃寺など比較的広い範囲で出土している。

古大内式軒丸瓦Ⅱ型、長坂寺式軒丸瓦Ⅰ型、北宿式軒平瓦Ⅰ型は、落地遺跡では出土量が少ないもしくは出土していない型式であり、軒瓦の供給体制が異なる、あるいは供給時期が異なり、落地遺跡よりは造営の時期が新しいことが考えられる。

今里幾次氏は長坂寺式と北宿式の関係について長坂寺式軒丸瓦Ⅰ型・長坂寺式軒平瓦→長坂寺式軒丸瓦Ⅱ型・北宿式軒平瓦Ⅰ型→北宿式軒丸瓦・北宿式軒平瓦Ⅱ型と推移したと整理している（今里1992）。

北宿式軒丸瓦は長坂寺式軒丸瓦の蓮弁を取り除いた文様とみられることから長坂寺式軒丸瓦→北宿式軒丸瓦の順番については首肯できる。長坂寺式軒丸瓦Ⅰ型が長坂寺式軒平瓦と北宿式軒丸瓦が北宿式軒平瓦Ⅱ型とセットになることはある程度認められるので、長坂寺式軒丸瓦Ⅰ型・長坂寺式軒平瓦→北宿式軒丸瓦・北宿式軒平瓦Ⅱ型となることも認められる。ただし長坂寺式軒丸瓦はⅡ型の複弁蓮華文からⅠ型の単弁蓮華文に変化したか、複弁蓮華文の原型から派生した可能性が考えられ、必ずしも長坂寺式軒丸瓦Ⅰ型・長坂寺式軒平瓦→長坂寺式軒丸瓦Ⅱ型・北宿式軒平瓦Ⅰ型の順にはならないように思える。長坂寺式軒丸瓦Ⅱ型・北宿式軒平瓦Ⅰ型が今のところ千種川流域の比較的狭い範囲でしか出土していないことは、広域に分布することが多い播磨国府系軒瓦のなかでは異なった瓦の生産体制をもっていたことが考えられる。

4　鬼瓦について

鬼瓦については播磨国府系軒瓦と同様に、駅家遺跡を中心として複数の遺跡から出土する鬼瓦は播磨国府系鬼瓦と呼ばれている（今里1992）。珠文帯をもたないⅠ類と珠文帯をもつⅡ類に分けられる。今回辻ヶ内遺跡で出土した鬼瓦はⅠ類にあたるが、これまで出土しているⅠ類とは笵を異にするため、従前より知られているものをＩＡ類、今回出土したものをＩＢ類と呼ぶこととする。目鼻口などの基本的な文様構成は同一であるが、頭や顔の横の巻毛の形状が異なっている。ＩＡ類と比べてＩＢ類は幅が広く、高さが低い。ただし、下顎が表現されていたとすると元の笵の状態では同じくらいの高さを持っていた可能性が高い。

Ⅰ類のモデルは平城宮式鬼瓦と考えられる。棘状に飛び出した目の周囲の表現や鼻の形状、頭や顔の横の巻毛などが平城宮Ⅳ式と類似し、下顎や口内の舌が表現されているところは平城宮Ⅱ式に類似している。いずれも平城宮瓦編年Ⅱ期（養老５年～天平17年（721 ～ 745））に製作が開始されたものとされている（毛利光1980）。

ＩＡ類の出土遺跡は多く、落地遺跡、小犬丸遺跡、古大内遺跡などの駅家遺跡や播磨国分寺、西条廃寺、野口廃寺で、Ⅱ類はやや少ないが古大内遺跡、辻井廃寺、伝播磨国分寺跡、平城京跡左京四条五坊八坪で出土するなど広域に分布するのに対して、ＩＢ類は長坂寺式軒丸瓦Ⅱ型・北宿式軒平瓦Ⅰ型に対応して独自に作られたことが考えられる。

播磨国府系ⅠA類

播磨国府系ⅠB類

播磨国府系Ⅱ類

平城宮Ⅱ式

平城宮Ⅳ式

縮尺　播磨国府系１／４　平城宮式１／８

出典
播磨国府系ⅠA型（合成）：今里 1960・今里 1992
播磨国府系ⅠB型：本書
播磨国府系ⅡA型（合成）：姫路市史編集専門委員会 2010・原田 2013
平城宮Ⅱ式・Ⅳ式：毛利光 1980

第 11 図　播磨国府系鬼瓦

第２節　辻ヶ内遺跡出土土器からみた遺跡の年代

１　辻ヶ内遺跡出土の土器

辻ヶ内遺跡からは、コンテナ２箱分の土器が発見された。古代の土器が大半を占め、わずかに近世以降の陶磁器が出土している。概観として、須恵器が多く土師器は少ない。杯・皿等の供膳具が多く、甕等の貯蔵具は少ない。８世紀を中心としながら、７世紀前半～10世紀の土器が出土している。

２　辻ヶ内遺跡の土器と播磨の窯跡（図版７・８、写真図版20・21）

Ｔ１から出土した須恵器について、播磨の窯と比較する。いずれも灰白色で、胎土が精緻かつ混和材の石英等砂が少なく、黒色の粒が混ざる粘土であり、播磨産と思われる。Ｔ１のＳＸ01で一番古いのは、口縁部が強く撫でられ、垂直に立ち上がる丸底の杯Ｇ（２）である。類例として白沢２号窯（兵庫県教育委員会1999）、天神山１号窯（西脇市教育委員会1983）等がある。それらの窯の杯Ｂやかえりのある杯蓋等共伴遺物の型式から、７世紀後半に位置付けられる。同じくＳＸ01瓦層から出土した杯Ｂ（１）は中谷４号窯（兵庫県教育委員会2000）の型式に近く、８世紀前半に位置付けられる。ＳＸ01下層から発見された杯Ｂ（６）も、細い高台と薄い器壁から同時期の中谷４号窯の土器に近く、８世紀前半の土器であると思われる。中層からは蓋（５）が出土している。口径や天井部・口縁部の形態から、環状鈕部分は欠損しているが稜椀の蓋の可能性がある。中谷４号窯、打越奥山窯跡群（山本2010）等、８世紀中葉に位置付けられると考える。ＳＸ01上層から出土した皿（４）が、Ｔ１出土土器の中では一番新しい。口縁部の形態から、９世紀前半と推定される。そのほか、包含層からは８世紀前半の杯蓋がみつかっている。以上から、ＳＸ01の土器は８世紀を中心としつつ７世紀後半～９世紀前半の間に収まると思われる。

Ｔ２の杯Ｂ（11）の底部はヘラ切りで、中心に向かって薄く下がり気味となる。中谷１号窯の特徴があり、９世紀前半と推測する。糸切り高台の椀（12）は投松５号窯（兵庫県教育委員会2001）の須恵器に近く９世紀末～10世紀前半の中に入ると思われる。整地層出土の糸切り底の椀（13）も札馬５号窯（加古川市教育委員会1999）の形態に近く、10世紀前半に該当する。

Ｔ３の陶器（14・15）は近世以降の遺物である。包含層から出土した杯Ｈ（16）は、口縁部の形態と法量から７世紀前半と推測され、椋峠１号窯（上月2004）等に類例がある。今回の出土土器の中で一番古い須恵器である。

Ｔ４のＳＤ01から発見された須恵器蓋（17）は、口縁部がやや鈎状になっており、８世紀後半の投松６号窯に類例がある（兵庫県教育委員会2001）。包含層から緑釉陶器（22）が出土しており、高台の形態から10世紀と思われる。その他の包含層出土須恵器は８世紀に収まると考える。須恵器杯Ｂや椀（26・27）は白沢５号窯（兵庫県教育委員会1999）や中谷４号窯に近く、８世紀前半に該当する。

３　辻ヶ内遺跡出土の製塩土器（図版７・８、写真図版21）

図示できた製塩土器は８点である。古代山陽道の駅家関連遺跡で製塩土器が出土する例はあまり多くないが、播磨の駅家では布勢駅家（小犬丸遺跡）から８点以上出土している（兵庫県教育委員会1989）等の類例がある。布目痕跡のある製塩土器（８・25）は神野の６類（神野2013）に該当し、８世紀後半とみられる。その他の製塩土器は、神野1-3,1-4類、４類に該当する個体であり、奈良時代に位置付けられると考える。

第３節　高田駅家について

１　築地遺構について

辻ヶ内遺跡の確認調査では駅館院の南辺と西辺の外郭線を想定した圃場整備前の地割部分の状況について確認を行い、Ｔ１・Ｔ２では想定通り築地に関連すると思われる遺構を検出した。他の駅家遺跡などで検出されている築地遺構と比較する（第12図）。

落地遺跡では築地本体の遺構が北辺、東辺、西辺で検出され、築地本体の基底幅は１.１ｍである。築地本体と犬走を含めた築地基壇の幅は、北辺で約２ｍ、東辺で４.５ｍ、南辺で３.５ｍ、西辺で２.５ｍと箇所によって異なっている。小犬丸遺跡では築地本体は検出されておらず、東辺築地の両側溝が検出されている部分で基壇幅が３.５ｍ程度である。播磨国分寺跡では畦畔下に西辺と南辺の築地が検出されている（多淵・山本1997）。基壇幅は西辺で３.３ ～ ３.６ｍ、南辺で約３ｍである。基壇上で検出された雨落溝の間隔が１.７ｍであることから、築地基底幅は１.２ ～ １.５ｍと考えられている。播磨国分尼寺跡では３ ～ ４ｍの基壇幅が、築地本体は添柱の痕跡が確認されていることから基底幅が１.２ｍ前後であることがわかる（姫路市教育委員会1993）。このように築地本体の基底幅は１.１ ～ １.２ｍ、基壇幅は３ ～ ４ｍ程度が標準的な規模といえよう。

Ｔ２では灰黄褐土層（18層）を南辺築地本体が載る基盤（基壇）の整地土、黄灰土層（17層）を築地本体と考えた。南側は圃場整備前の耕作地の造成により若干削られているが、基盤幅は３ｍ程度と考えられる。築地本体とした土層の幅は約２ｍと広すぎるので、内側の崩れた部分を認識できなかった可能性が高い。

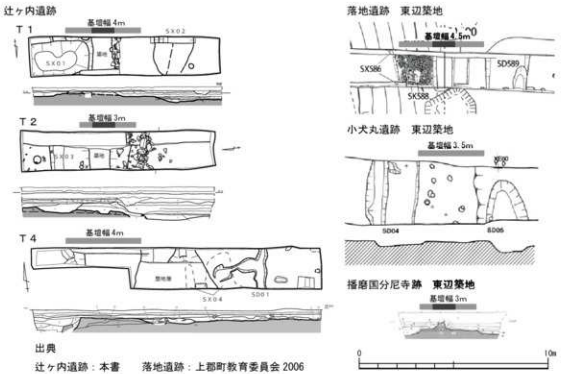
Ｔ１では黄褐色土（14層）を西辺築地基盤層と考えた。西側は圃場整備前の耕作地の造成により削られているが、黄褐色土層の東端と西側側溝と考えられるＳＸ02との間の４ｍ程度が基壇幅と考えられ、その中心にあたる圃場整備前の畦畔に一致する部分に築地本体があったと想定される。基壇に切れ込んで設けられている土坑状の遺構のＳＸ01は、埋土の中・下層から出土している土器から８世紀前半～中葉の時期の遺構と考えられるが、築地との関係や用途は不明である。

Ｔ４では西辺想定線の位置は圃場整備時に削平を受けているが高まりをなしていたことがわかる。整地層の端から圃場整備前の耕作地の段の端までの幅は約３ｍである。Ｔ１で想定されている基壇幅は約４ｍであることから、耕作地の造成により西側が削られている可能性も高いと考えられる。

２　建物配置について

残念ながら内部空間については調査をほとんど及ぼすことができなかったことにより、建物についての情報を得ることができなかった。築地については水田の区画の畦畔部分にその痕跡を残していることが判明したことから、圃場整備前の区画に、内部の状況も反映している可能性を検討する。

圃場整備前の水田の区画は他の箇所と比べて細かく長方形に区切られ、周囲で見られる自然地形の等高線に応じて曲線をなす部分が少ないことが特徴的である。東西は４段に区切られ、東側２段は幅がやや狭く、３段目の幅が広い。南北はおおむね３段に分かれている。この区画の配置に小犬丸遺跡で検出されている建物の配置を重ねてみる（第13図）とある程度一致するように見え、建物が想定されない中央の広場部分の区画にのみ等高線に沿った曲線の区画が存在する。このように辻ヶ内遺跡内部の建物については小犬丸遺跡と類似する配置であったと想定しておきたい。



出典

辻ヶ内遺跡：本書　　落地遺跡：上郡町教育委員会 2006

小犬丸遺跡：兵庫県教育委員会 1987

播磨国分尼寺跡：姫路市教育委員会 1993

第 12 図　築地の比較

航空写真：国土地理院　昭和39年撮影　地図：上郡町基本都市計画図　平成９年作図

第 13 図　辻ヶ内遺跡の遺構

3　高田駅家推定地 辻ヶ内遺跡の調査成果

高田駅家の所在地

確認調査により築地と考えられる遺構が検出されたことにより、小犬丸遺跡の駅館院と同規模である１辺約80mの築地で囲まれた区画の存在が推定でき、築地近辺から出土した瓦には播磨国府系軒瓦・鬼瓦が含まれていたことから、辻ヶ内遺跡が高田駅家の所在地である可能性が極めて高いことが確かめられた。

遺跡の存続時期

出土須恵器は７世紀前半から10世紀前半までの時期のものが出土している。７世紀代の遺構は確認できず、当地に道路が敷設されたと考えられる７世紀からこの地に駅家が存在していたかはわからない。製塩土器の出土を含めて駅家の活動の盛期は８世紀で、10世紀前半までは存続していたと思われる。内部の建物付近まで調査を及ぼすことができなかったため、落地遺跡や小犬丸遺跡のように11世紀まで存続していたかはわからないが、可能性は低いように思われる。

瓦の様相

軒瓦の出土数が少ないためはっきりしたことはわからないが、軒瓦の型式は落地遺跡では従属的な型式のものか出土しない型式のものであることから、落地遺跡より新しく造営されたことを示していると見られる。平瓦のタタキ目の文様から見ると小犬丸遺跡の平瓦と近い関係があり、北宿式軒平瓦Ⅰ型や播磨国府系鬼瓦ⅠＢ類など出土例が千種側流域の近隣に限られるものが含まれているように、瓦の供給状況から見ると複雑な様相を示している。

遺跡所在地の地名

「大道ノ下」、「前田」など道路や駅家に関連する地名が近隣に存在するが、遺跡の名称となった小字名の「辻ヶ内」についても駅館院を取り囲む築地に由来する「ツイジガウチ」から変化したことが考えられる。駅家廃絶後すぐに耕地化されることなく、築地の高まりが残ることにより堆積物が溜まったことは黒褐色の包含層が確認されることからわかる。小字名の成立がいつ頃かはわからないが、長く築地の存在が認識されつづけたのであろう。

地域景観のなかの辻ヶ内遺跡

辻ヶ内遺跡所在する高田盆地は、東西を古代山陽道で貫かれ、その南北に条里水田が広がっている。辻ヶ内遺跡は古代山陽道を東から椿峠を越えて下り、開けた盆地部にさしかかった西側に眺望のよい山裾に位置している。駅家の駅館院の南辺は古代山陽道の道代の北辺と駅館院の東辺は条里の区画に合わせて設置され、古代山陽道を中心として計画された地域景観のなかに組込まれている。

盆地中央の平野部を挟んで西側では古代山陽道の北側の丘陵部に７世紀中葉の「祇園塚型石室」を埋葬施設とする神明寺１号墳や横口式石郭を埋葬施設とする奥井７号墳などが並び、古代山陽道の南側の東向きに眺望のよい微高地に、塔心礎が所在し寺院跡の可能性が高まった神明寺遺跡が所在している。後に高田郷と呼ばれたコンパクトな空間のなかで、古代山陽道の敷設を契機として条里水田の開発が進められ、その開発を主導した有力者とその基盤をもとに経営された駅家の存在から、交通路の発達による開発の典型的な姿を見てとることができる。

参考文献

足利健亮1992「山陽道の歴史地理的考察」『山陽道（西国街道）』兵庫県教育委員会

今里幾次1960『播磨国分寺式瓦の研究』播磨郷土文化協会

今里幾次1980『播磨考古学研究』精文舎

今里幾次1992「龍野市小犬丸遺跡出土の古瓦」『布勢駅家跡』龍野市教育委員会

今里幾次1995『播磨古瓦の研究』真陽社

今里幾次2006「野磨駅家出土の古瓦」『古代山陽道　野磨駅家跡』上郡町文化財調査報告 4

今里幾次2013「播磨国府系瓦の展望」『姫路市史』第１巻下　本編　考古

岩戸晶子2006「南面築地出土の瓦について」『小犬丸中谷廃寺　中谷遺跡・中谷古墳』兵庫県文化財調査報告第306冊

榎原雅治2000『日本中世地域社会の構造』校倉書房

加古川市教育委員会 1982『札馬古窯跡群発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告 7

鎌谷木三次1942『播磨上代寺院址の研究』成武堂

上郡町教育委員会2005『落地遺跡（八反坪地区）』上郡町文化財調査報告 3

上郡町教育委員会2006『古代山陽道　野磨駅家跡』上郡町文化財調査報告 4

上郡町史編纂専門委員会2008『上郡町史』第１巻本文編Ⅰ

上郡町史編纂専門委員会1999『上郡町史』第３巻史料編Ⅰ

岸本道昭2006『山陽道駅家跡』

土井昭信2004『播磨地方における６世紀・７世紀の須恵器生産』

小森俊寛2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～19世紀－』京都編集工房

私立赤穂郡教育会1973『赤穂郡誌』

神野恵 2013「都城の製塩土器」『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所

西播流域史研究会1991『有年考古館蔵品図録』財団法人有年考古館

第19回播磨考古学研究集会実行委員会2018『第19回播磨考古学研究集会資料集　須恵器生産からみた播磨』

高橋美久二1982「古代の山陽道」『考古学論考』平凡社

高橋美久二1990「古代播磨国の駅家」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』

高橋美久二1992「山陽道の考古学的考察」『山陽道（西国街道）』兵庫県教育委員会

龍野市教育委員会1992『布勢駅家―小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報』龍野市文化財調査報告 8

龍野市教育委員会1994『布勢駅家―小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報』龍野市文化財調査報告11

多淵敏樹・山本博利1997「第一　播磨　二　史跡に伴う発掘調査」『新修国分寺の研究』第７巻補遺

西脇市教育委員会 1983『播磨・緑風台窯址』西脇市埋蔵文化財調査報告１

原田憲二郎2013「平城京における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告ＸＶ』

姫路市教育委員会1993『播磨国分尼寺跡－遺跡発掘事前総合調査概要報告－』

姫路市史編集専門委員会2010『姫路市史』第７巻下　資料編考古

兵庫県教育委員会1987『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊

兵庫県教育委員会1989『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告　第66冊

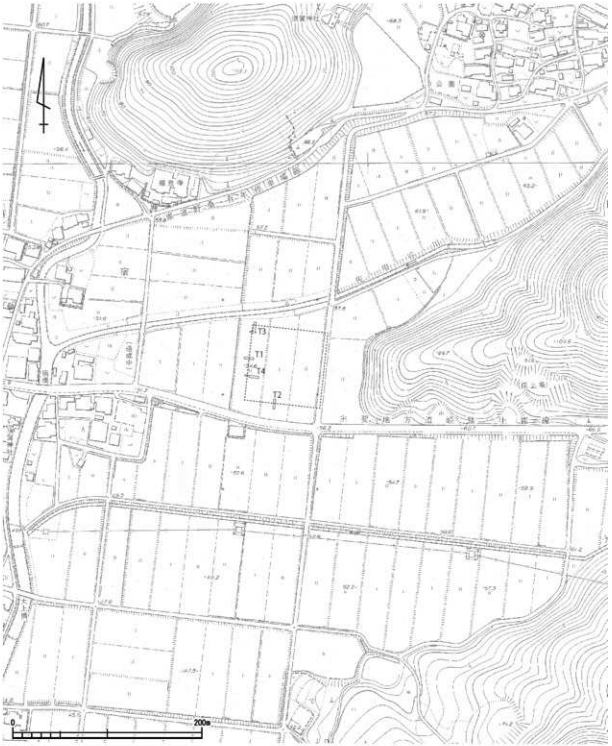
兵庫県教育委員会1999『白沢３・５号窯』　兵庫県文化財調査報告第184冊
兵庫県教育委員会 2000『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－』　兵庫県文化財調査報告第203冊
兵庫県教育委員会2001『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』　兵庫県文化財調査報告第217冊
兵庫県立考古博物館2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第384冊　兵庫県教育委員会
兵庫県立考古博物館2013『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第455冊　兵庫県教育委員会
兵庫県立考古博物館2017『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第494冊　兵庫県教育委員会
兵庫県立考古博物館2018『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅳ』兵庫県文化財調査報告第455冊　兵庫県教育委員会
毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－８世紀を中心として－」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所
山根実生子1987「瓦」『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊
山本和子2010「打越奥山窯跡群」『姫路市史』第７巻下　資料編考古
吉本昌弘1985「播磨の山陽道古代駅路」『歴史と神戸』第24巻第１号

付表１　土器一覧表

報告書番号	トレンチ	出土場所 遺構	土層	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・手法	胎土	焼成	色調
1	T1	SX01	上層	須恵器	杯B	(15.5)	4.15	(11.4)	底部回転ヘラ切り。貼り付け高台	精緻。径1mm以下の長石を少量含む	非常に良	N8/灰白
2	T1	SX01	上層	須恵器	杯G	(10.4)	(3.0)	－	口縁部～体部回転ナデ	精緻。径2mm以下の石英を少量含む	良	内 2.5YR/1灰白 外 2.5Y7/1灰白
3	T1	SX01	上層	須恵器	壺	－	(2.0)	－	底部回転ヘラ切りのちミガキ	精緻。径1mm以下の長石・石英を多量に含む	良	内 2.5Y7/2灰黄 外 5YR/1灰白
4	T1	SX01	上層	須恵器	皿	(16.6)	(1.7)	－	口縁部～体部回転ナデ	精緻。径1mm以下の石英多量に含む	良	N8/灰白
5	T1	SX01	中層	須恵器	蓋	(19.1)	(2.5)	－	天井部回転ヘラ切り。自然釉付着	精緻。径1mm以下の石英やや多く含む	非常に良	N8/灰白 自然釉 5GY5/1オリーブ灰
6	T1	SX01	下層	須恵器	杯B	(15.7)	4.55	(12.2)	底部回転ヘラ切り	精緻。径1mm以下の石英等砂を少量含む	非常に良	N8/灰白
7	T1	SX01	－	土師器	甕	(16.8)	(3.6)	－	外面体部タテハケ。内面ヨコハケ	やや粗い。径4mm以下の長石・石英を多量に含む	やや良	内 7.5YR3/4 浅黄橙 外 7.5YR7/4にぶい橙
8	T1	SX01	－	製塩土器		(10.8)	(9.2)	－	外面に指頭痕あり。内面に布目痕あり	精緻。径5mm以下の長石・石英を多く含む。板状の可能性のある圧痕あり	やや不良	内 10YR8/3浅黄橙 外 5YR7/3にぶい橙
9	T1	SX01	－	製塩土器		－	(2.2)	－	全体的に摩滅	粗い。径5mm以下の角礫状の石英・長石を非常に多く含む	不良	内 2.5YR7/4淡赤橙 外 5YR7/4にぶい橙
10	T1	－	包含層	須恵器	蓋	(17.6)	(1.8)	－	天井部回転ヘラ切り。内面不定方向のナデ	精緻。径1mm以下の石英を少量含む	良	内 5YR/1灰白 外 7.5YR/1灰白
11	T2	SX03	上層	須恵器	杯B	－	(1.5)	(10.4)	底部回転ヘラ切り	精緻。径0.5mm以下の石英を微量含む	不良	2.5YR/1灰白
12	T2	SX03	瓦群A	須恵器	椀	－	(2.7)	8.2	底部回転糸切り	精緻。径1mm以下の長石・石英をやや多量に含む	良	N8/灰白
13	T2	整地層	最下の床土	須恵器	椀	－	(1.0)	(6.9)	底部回転糸切り	精緻。径1mm以下の石英を少量含む	非常に良	N8/灰白
14	T3	北側石列裏込め	－	施釉陶器	皿	(9.0)	(1.75)	－	内面～外面口縁部まで施釉	非常に精緻	良	釉 2.5YR/2灰白 胎 5Y7/2灰白
15	T3	－	北端砂礫層	施釉陶器	蓋	－	(1.35)	－	天井部縁まで施釉	非常に精緻。雲母微量に含む	良	釉 7.5YR8/4浅黄橙 胎 5YR5/3にぶい赤褐
16	T3	－	包含層	須恵器	杯H	－	(2.5)	－	体部回転ヘラケズリ	精緻。径1mm以下の長石を微量に含む	やや不良	5Y7/1灰白
17	T4	SD01・SX01		須恵器	蓋	(16.4)	(2.45)	－	天井部ヘラケズリ	精緻。径0.5mm以下の長石を多く含む	非常に良	5Y7/1灰白
18	T4	SX04	－	製塩土器		(14.0)	(5.0)	－	手捏ね。内外面に指頭痕あり	粗い。径5mm以下の角礫状の石英、雲母を非常に多く含む	良	内 5YR6/6橙 外 2.5YR5/6 明赤褐
19	T4	SX04	－	製塩土器		(14.2)	(6.0)	－	手捏ね。口縁部付近ナデ	粗い。径3mm以下の石英・長石・凝灰岩等砂多量に含む	良	7.5YR6/4にぶい橙
20	T4	SX04	－	製塩土器		－	(5.1)	－	手捏ね。内外面に指頭痕あり	粗い。径3mm以下の角礫状の石英・長石多量に含む	やや不良	10YR6/3にぶい黄橙
21	T4	SX04	－	製塩土器		－	(5.0)	－	手捏ね。外面に指頭痕あり	粗い。径5mm以下の石英・長石を多く含む	やや不良	7.5YR6/6 橙
22	T4	－	包含層	緑釉陶器	椀	－	(1.7)	(6.2)	見込みに沈線あり。体部回転ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り。ケズリ出し高台。	非常に精緻。径1mm以下の黒色粒微量に含む	やや不良	胎 10YR8/2灰白 釉 5GY7/1明オリーブ灰
23	T4	－	包含層	須恵器	蓋	(16.8)	(1.95)	－	内外面ともに回転ナデ	精緻。径1mm以下の長石を少量含む	やや不良	7.5YR/1灰白
24	T4	－	包含層	須恵器	壺	－	(5.3)	－	ロクロナデ。降灰あり	精緻。径1mm以下の黒色粒微量に含む	非常に良	N8/灰白
25	T4	－	包含層	製塩土器		－	(3.55)	－	内面に布目痕あり	粗い。径2mm以下の石英・長石をやや多く含む	やや良	7.5YR7/4にぶい橙
26	T4	－	包含層	須恵器	杯B	(11.2)	3.8	(7.8)	底部回転ヘラ切り。貼付高台 内面～外面高台底まで火襷あり。	精緻。径1mm以下の長石を少量含む	非常に良	N8/灰白
27	T4	－	包含層	須恵器	椀	(16.6)	(5.6)	－	口縁部～体部 回転ナデ	精緻。径1mm以下の長石を微量に含む	非常に良	2.5Y7/1灰白
28	T4	－	包含層	須恵器	皿	－	(1.8)	(15.0)	底部回転ヘラ切り。貼り付け高台	精緻。径1mm以下の長石を少量含む	良	10YR7/1灰白
29	T4	－	包含層	製塩土器			(10.5)	(4.55)	－	指頭痕あり。外面輪積み痕あり 内面斜め上方向に強いナデ	やや粗い。径2mm以下の長石を微量に含む	良	内 5YR7/3にぶい橙 外 5YR5/4にぶい赤褐
30	T4	－	包含層	土製品		積(4.2)	縦(4.5)	厚み(1.7)	外面ヘラケズリ	径3mm以下の長石やや多く径1mm以下の石英少量含む	やや不良	2.5Y6/2灰黄

付表2 瓦一覧表

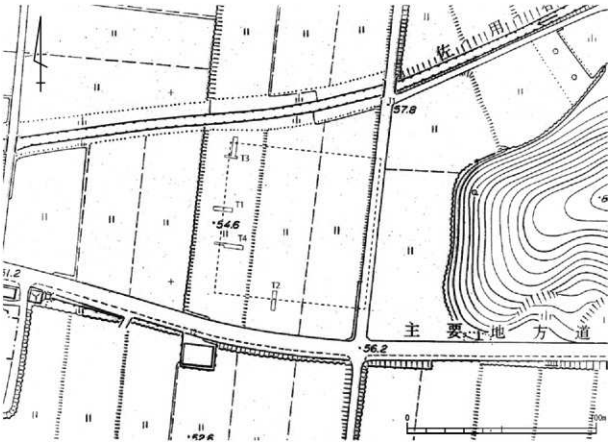
番号	器種	分類	法量(cm)				布目	調査区	遺構	層位
			長さ	幅	厚み	その他	(本/1cm)			
T1	軒丸瓦	古大内式 II型	(11.7)	(12.7)	3.2	中房径(6.4)		T1	SX01	上層
T2	軒丸瓦	長坂寺式 I型	(7.85)	(8.3)	3.0	瓦当面径 (6.65)		T2	SX03	瓦群B
T3	軒丸瓦	長坂寺式	(3.65)	(9.3)	1.1	瓦当面径 (6.65)		T4	包含層	3区
T4	軒平瓦	北宿式 I型	(18.95)	(18.9)	4.9		4×5	T1	SX01	下層
T5	丸瓦		(11.35)	15.25	2.0	玉縁径4.8		T1	SX01	上層
T6	丸瓦		(22.7)	(12.8)	1.8	玉縁長5.6		T2	SX03	瓦群A
T7	丸瓦		(12.35)	14.45	2.55	玉縁長5.4	9×7	T2	SX03	瓦群A
T8	丸瓦		(15.35)	(7.25)	2.5	玉縁長6.1	9×7	T4	SX04	
T9	丸瓦		(33.35)	(10.3)	2.1	丸瓦部長 33.35	8×6	T1	SX01	上層
T10	丸瓦		(13.6)	(12.6)	2.5		8×6	T2	SX03	瓦群A
T11	丸瓦		(14.35)	(6.6)	1.75		8×7	T2	SX03	瓦群A
T12	丸瓦		(22.95)	15.45	2.2		9×7	T1	SX01	上層
T13	丸瓦		(13.5)	11.7	1.45		10×10	T4	包含層	1区
T14	丸瓦		(12.35)	(12.05)	2.25			T4	包含層	1区
T15	平瓦	H1類	(12.1)	(14.2)	2.3		9×10	T1	SX01	上層
T16	平瓦	H1類	(13.7)	(15.7)	1.75		9×10	T1	SX01	下層
T17	平瓦	H1類	(8.0)	(13.0)	2.3		9×9	T1	SX01	
T18	平瓦	H1類	(19.6)	(18.6)	2.5		9×10	T2	SX03	瓦群A
T19	平瓦	H2類	36.2	(14.95)	1.85		9×8	T2	SX03	瓦群A
T20	平瓦	H2類	(22.05)	(14.25)	2.5		7×9	T1	SX01	中層
T21	平瓦	H2類	(13.0)	(8.55)	2.2		7×9	T2	SX03	瓦群A
T22	平瓦	H2類	(7.85)	(16.85)	2.15		8×9	T2	SX03	瓦群A
T23	平瓦	H2類	(15.9)	(13.9)	2.1		8×9	T2	SX03	瓦群A
T24	平瓦	H3類	(12.3)	(19.8)	2.4		5×5	T4	包含層	3区
T25	平瓦	H3類	(14.35)	(13.1)	2.5		5×7	T4	SX04	
T26	平瓦	H3類	(22.8)	(18.5)	2.35		7×7	T1	SX01	上層
T27	平瓦	H4類	(19.8)	(12.7)	2.5		9×8	T1	SX01	下層
T28	平瓦	H4類	(13.85)	(11.5)	3.05		7×8	T1	SX01	
T29	平瓦	H5a類	(13.9)	(11.9)	2.05		7×8	T1	SX01	中層
T30	平瓦	H5a類	(18.25)	(16.1)	1.9		8×9	T4	SX04	
T31	平瓦	H5b類	(22.6)	(22.75)	2.6		8×9	T4	SX04	
T32	平瓦	H5c類	(14.9)	(15.55)	2.45		8×9	T2	SX03	瓦群A
T33	平瓦	H6a類	36.3	28.75	2.4			T2	SX03	瓦群A
T34	平瓦	H6a類	(17.35)	(20.75)	2.5		6×7	T2	SX03	瓦群A
T35	平瓦	H6a類	(19.8)	(14.25)	2.25		8×9	T1	SX01	上層
T36	平瓦	H6b類	(14.2)	(13.4)	2.15			T4	SX04	
T37	平瓦	H6c類	(20.15)	(18.65)	2.15			T2	SX03	瓦群A
T38	平瓦	H6c類	33.45	27.6	2.65		9×9	T1	SX01	上層
T39	平瓦	H7類	33.05	24.8	1.95	重量3260g	6×8	T2	SX03	瓦群A
T40	平瓦	H7類	(19.7)	(17.7)	2.3		8×7	T1	SX01	中層
T41	平瓦	H7類	(10.8)	(11.45)	2.6		7×7	T1	SX01	
T42	平瓦	H7類	(17.3)	(12.0)	2.65		8×9?	T4	SX04	
T43	平瓦	H7類	(13.95)	(12.85)	1.75		7×7	T2	SX03	瓦群A
T44	平瓦	H8類	(17.6)	(17.15)	2.35		8×7	T1	SX01	下層
T45	平瓦	H8類	(21.8)	(14.9)	2.55		8×8	T1	SX01	中層
T46	平瓦	H8類	(29.2)	29.3	2.6			T4	SX04	
T47	平瓦	H8類	(19.75)	(18.85)	2.7		8×10	T2	SX03	瓦群A
T48	熨斗瓦	H6a類	(22.5)	12.8	2.6		8×7	T1	SX01	上層
T49	熨斗瓦	H6b類	(14.3)	12.8	2.55		8×7	T2	SX03	瓦群A
T50	鬼瓦		18.6	27.65	6.25			T2	SX03	瓦群A
T51	鬼瓦		(10.3)	(12.3)	(3.3)			T2	SX03	瓦群B



地図：上郡町基本都市計画図　平成９年作図　1/4000

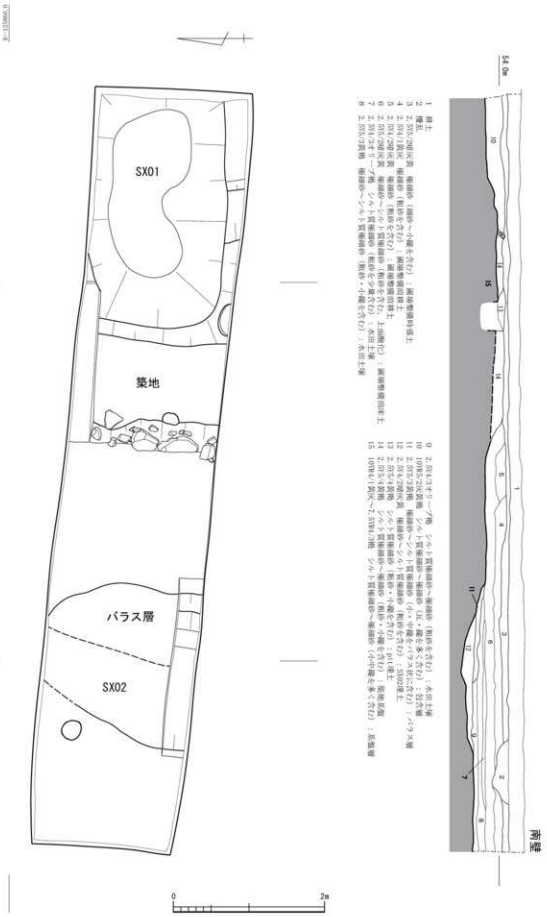
調査地地形図

図版 2



航空写真：国土地理院　昭和39年撮影
地図：上郡町基本都市計画図　平成９年作図

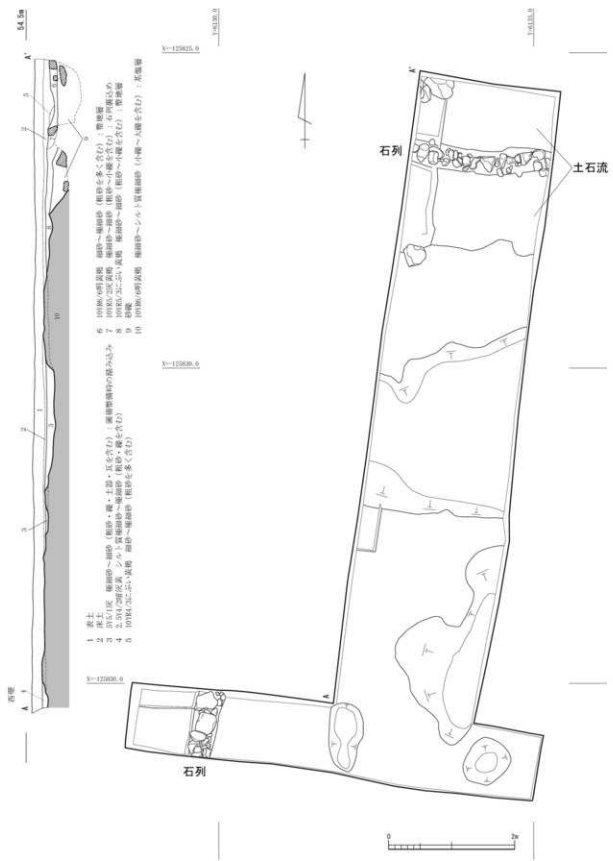
トレンチ配置図



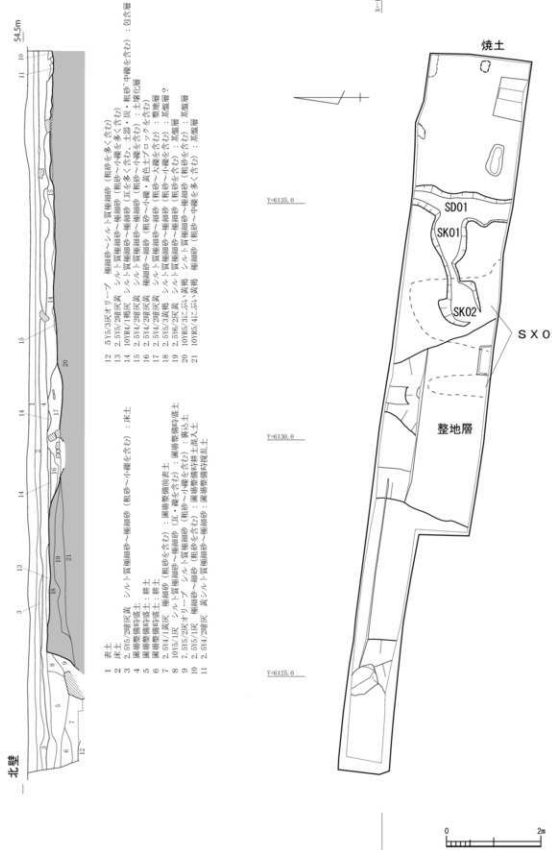
Ｔ１　平面図・断面図

図版 4

T２　平面図・断面図

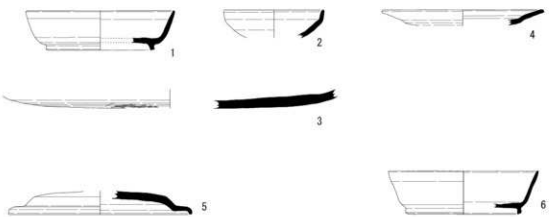

54.5m
A'
A
西壁
1 表土
2 床土
3 5YR/1灰 極細砂～細砂（粗砂・礫・土器・瓦を含む）；薄黒鉄鋼粒の焼み込み
4 2.5YR/2灰黄 シルト質極細砂～極細砂（粗砂・礫を含む）
5 10YR/3Cシルト質 細砂～極細砂（粗砂を多く含む）
6 10YR/6明黄褐 細砂～極細砂（粗砂を多く含む）；鉄塩層
7 10YR/3灰黄褐 極細砂～細砂（粗砂～小礫を含む）；石質鉄込め
8 10YR/3Cシルト質 極細砂～細砂（粗砂～小礫を含む）；鉄塩層
9 砂礫
10 10YR/6明黄褐 極細砂～シルト質極細砂（小礫～大礫を含む）；黒塩層
X=125825.0
X=125830.0
X=125830.0
X=125825.0
石列
土石流
石列
0
2m

T３　平面図・断面図


北壁
54.5m
1 表土
2 表土
3 2.5Y3/2黒沢系 シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む） :HC土
4 縄維整備時造土
5 縄維整備時造土
6 縄維整備時造土 : HC土
7 縄維整備時造土 : HC土
8 2.5Y7/1灰沢 : 暗褐砂（粗砂を含む） : 縄維整備時造土
9 2.5Y3/1黒 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 縄維整備時造土
10 7.5YR3/4オリーブ : シルト質暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 縄維整備時造土
11 2.5Y3/2黒沢 : 黒シルト質暗褐砂～暗褐砂 : 縄維整備時造土
12 5YR3/3暗オリーブ : 暗褐砂～シルト質暗褐砂（粗砂を多く含む）
13 10YR3/1黒 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む）
14 10YR3/1黒沢 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（江を多く含む。土器・炭・粗砂～中礫を含む） : 古代層
15 2.5Y3/2黒沢系 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む）
16 2.5Y3/2黒沢系 : 暗褐砂～シルト質暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 古代層
17 2.5Y3/2黒沢系 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 整地層
18 2.5Y3/2黒沢 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 整地層
19 10YR3/2灰黒 : シルト質暗褐砂～暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 整地層？
20 10YR3/2灰黒 : 暗褐砂～シルト質暗褐砂（粗砂～小礫を含む） : 整地層
21 10YR3/4にぶい黄褐 : 暗褐砂（粗砂～中礫を多く含む） : 整地層
X=-119000.0
Y=61135.0
Y=61130.0
Y=61125.0
焼土
SD01
SK01
SK02
SX04
整地層
0
2m

T４　平面図・断面図

【T 1】



1～9　SX01

包含層

【T 2】

11・12　SX03

整地層

T 1・T 2　土器

【Ｔ３】

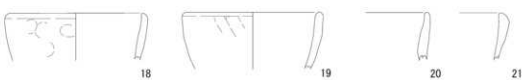
北端石列裏込め

北端砂礫層

包含層

【Ｔ４】

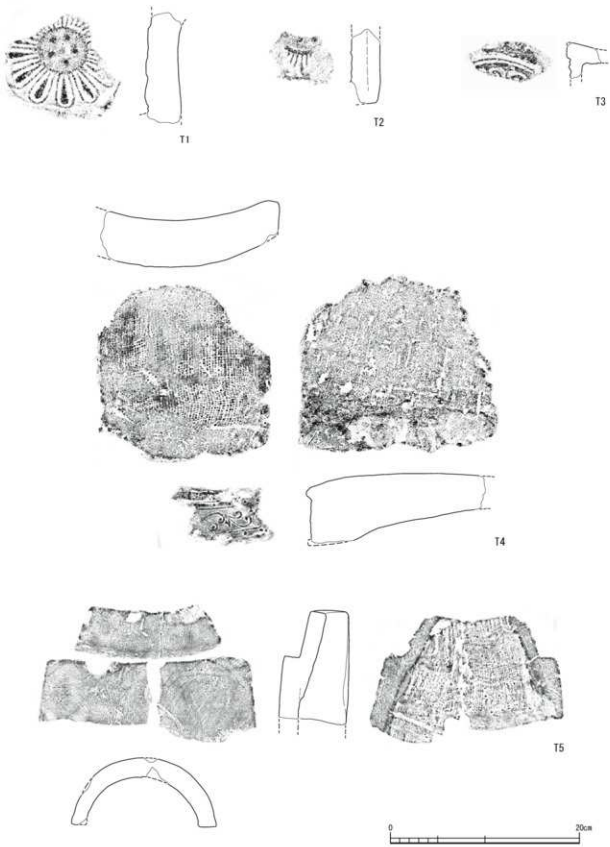
SD01



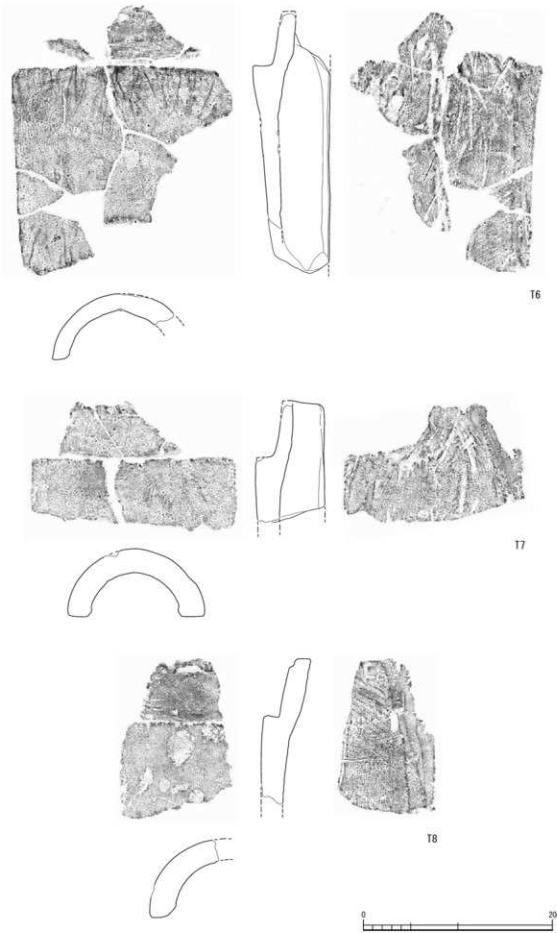
18～21　ＳＸ０４

22～30　包含層

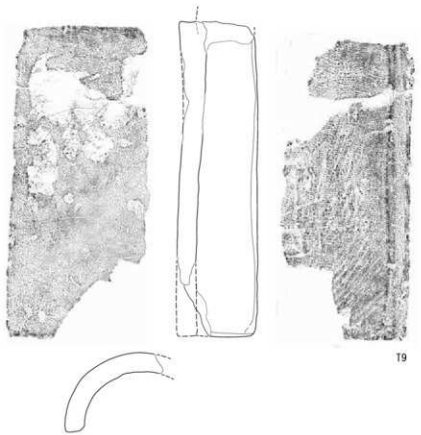
Ｔ３・Ｔ４　土器



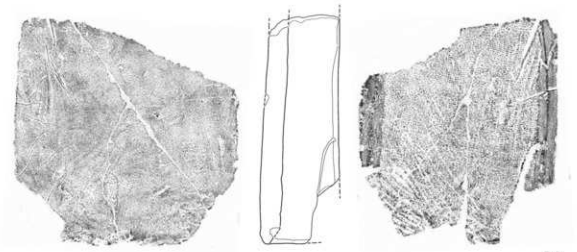
瓦 1　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦

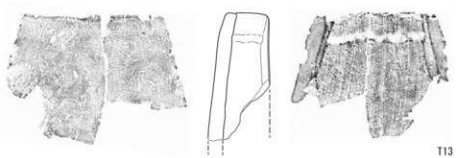


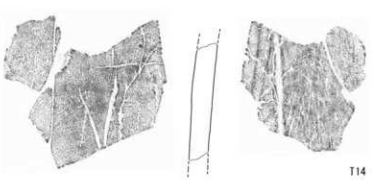
瓦２　丸瓦



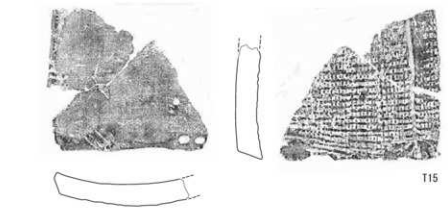
瓦3　丸瓦

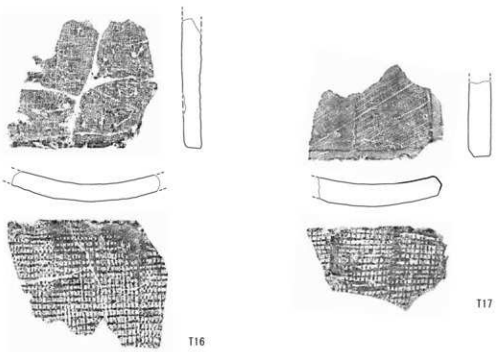


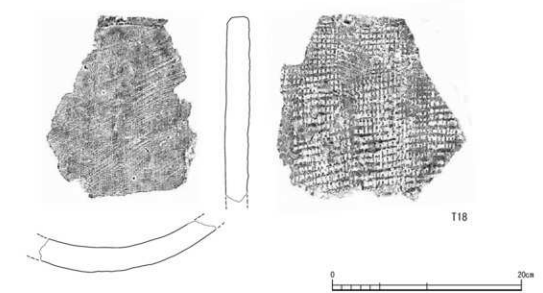




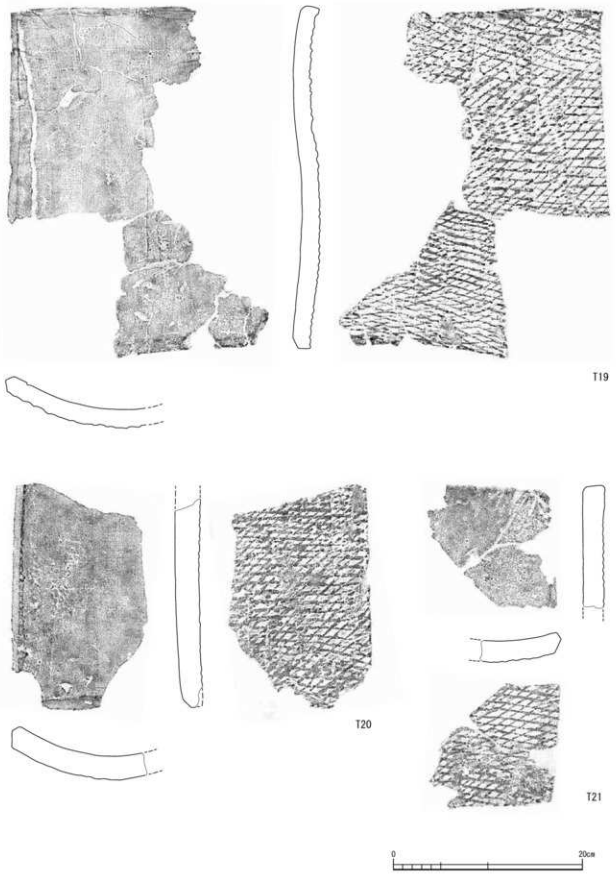
瓦4　丸瓦



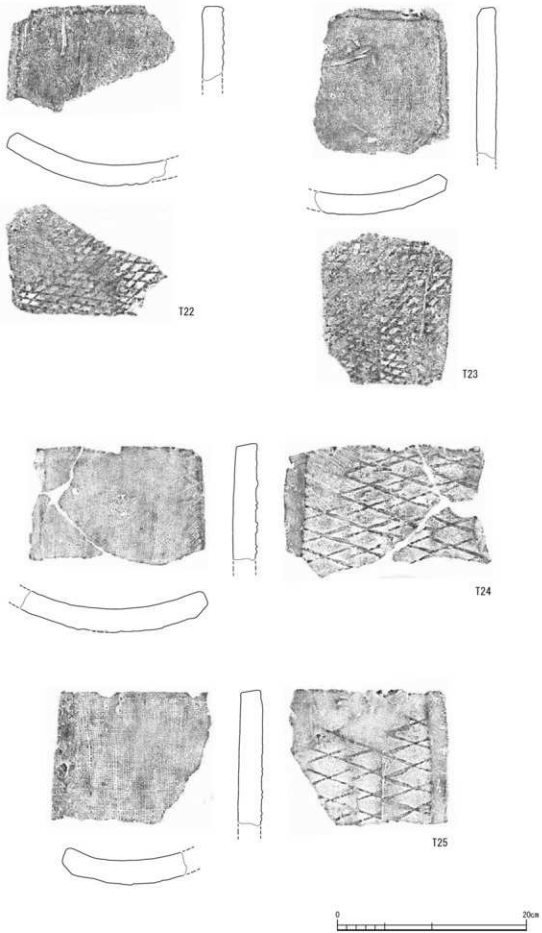




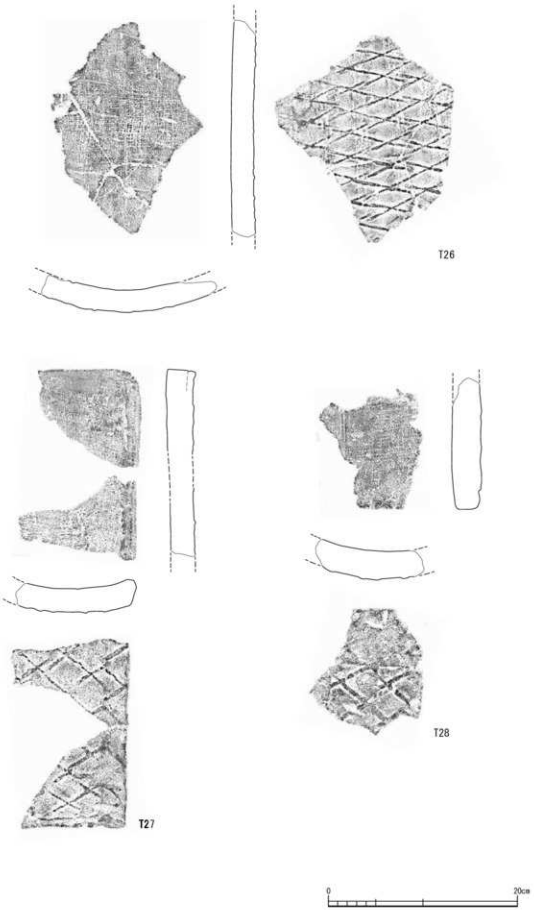
瓦５　平瓦Ｈ１類



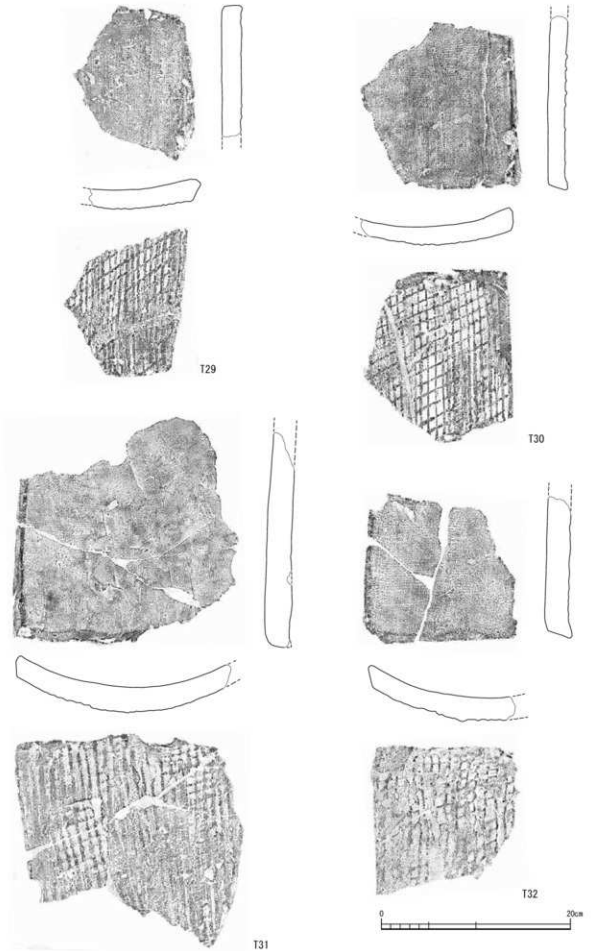
瓦6　平瓦H２類



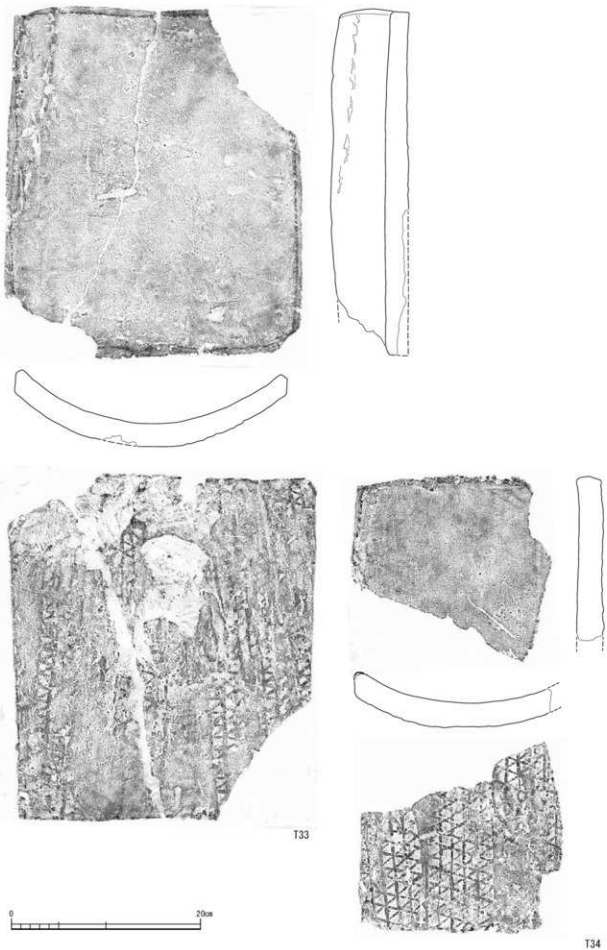
瓦７　平瓦Ｈ２・３類



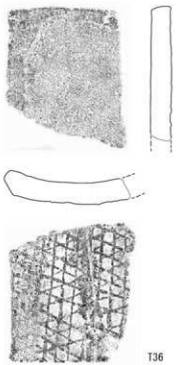
瓦８　平瓦Ｈ３・４類

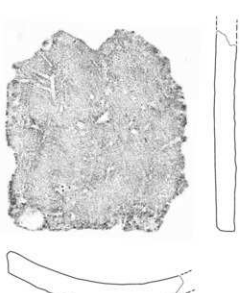


瓦９　平瓦Ｈ５類

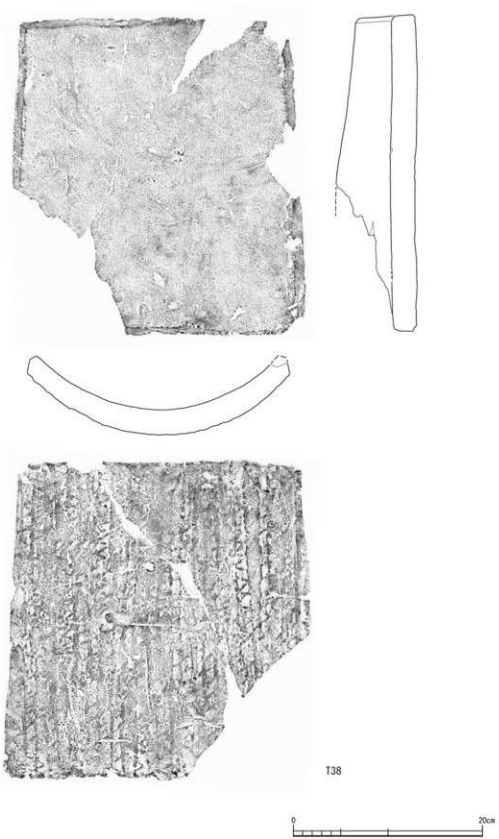


瓦 10　平瓦Ｈ６類

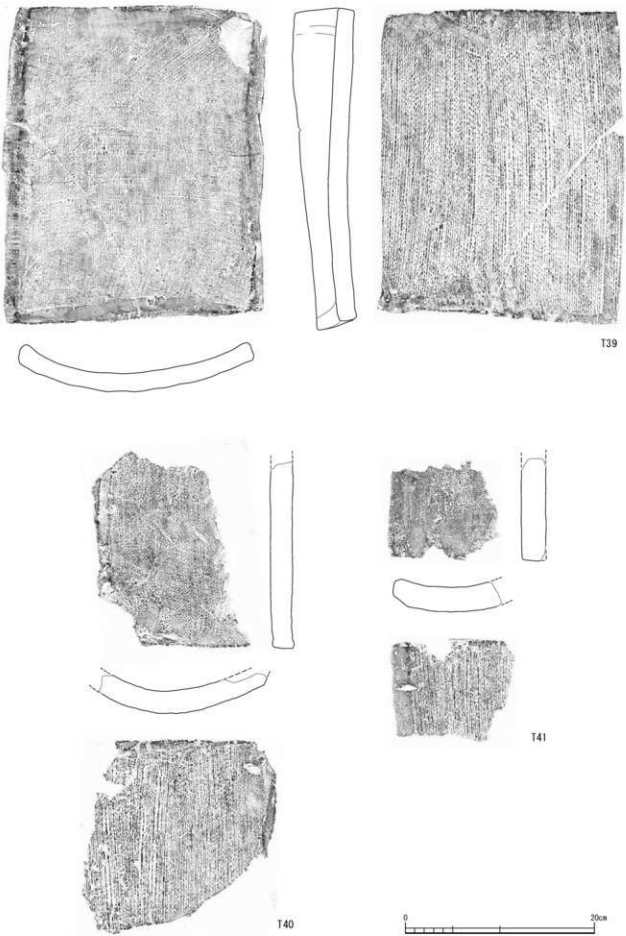




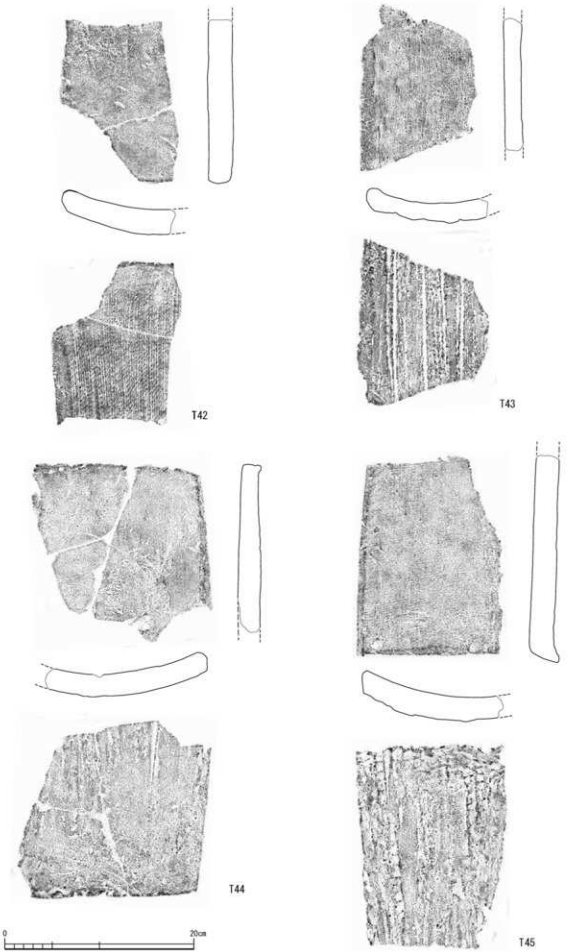
瓦 11　平瓦Ｈ６類



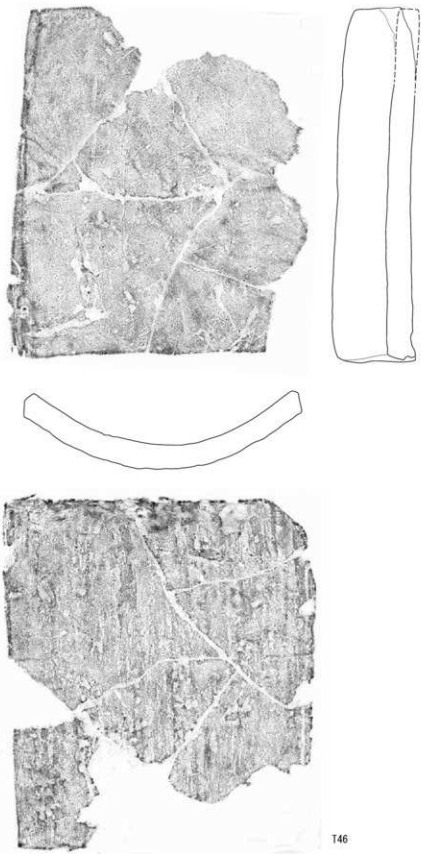
瓦 12　平瓦Ｈ６類



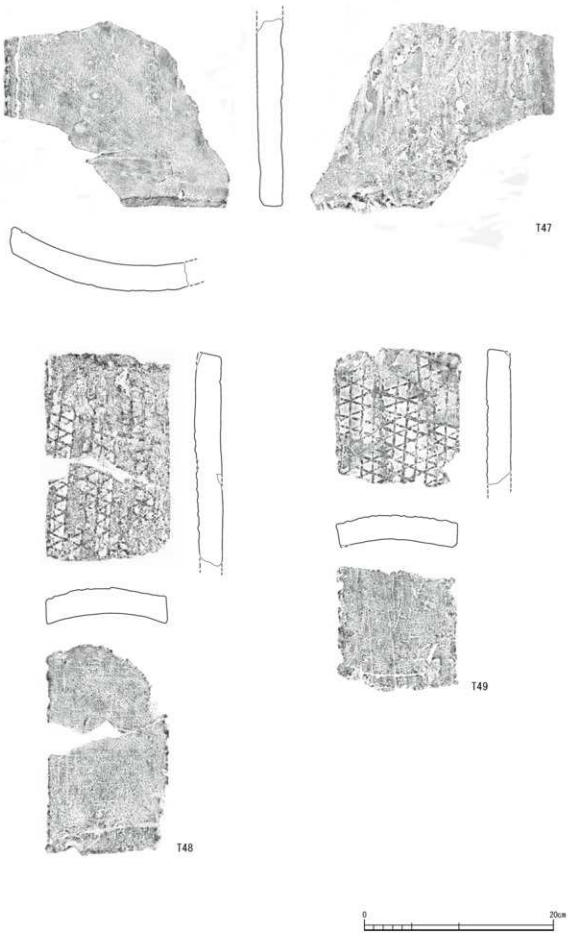
瓦 13　平瓦Ｈ７類



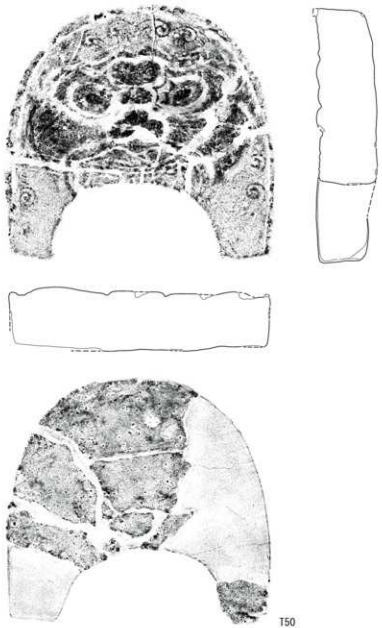
瓦 14　H 7・8類



瓦 15　平瓦Ｈ８類



瓦 16　平瓦Ｈ８類・熨斗瓦

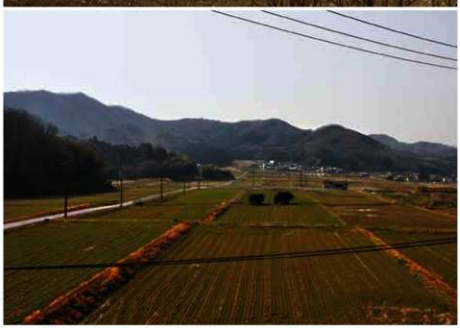


瓦 17　鬼瓦

高田地区空中写真　国土地理院昭和 39 年撮影

佐用谷付近空中写真　国土地理院平成 22 年撮影

調査地遠景
東から



調査地遠景
北から

調査地遠景
北西から

Ｔ１　全景　西から

Ｔ１　全景　東から

Ｔ１　築地
南から

Ｔ１　築地
北から

Ｔ１　築地
北西から

Ｔ１　墓地
北東から

Ｔ１　ＳＸ０２
南から

Ｔ１　ＳＸ０２
北西から

T１　ＳＸ０１
南東から

T１　ＳＸ０１　瓦出土状況
南東から

T１　ＳＸ０１　瓦出土状況
北から

Ｔ２　全景　北から

Ｔ２　全景　南から

Ｔ２　北半東壁　土層断面　西から

Ｔ２　東壁　土層断面　南西から

Ｔ２　築地
東から

Ｔ２　築地　土層断面
西から

Ｔ２　築地・ＳＸ０３
北東から

T２　SX０３　瓦出土状況
北東から

T２　SX０３
鬼瓦出土状況
北東から

T２　石列
東から

Ｔ３　全景　北から

Ｔ３　西壁　南東から

Ｔ３　北端部土石流
土層断面
北東から

Ｔ３　南部拡張区
西から

Ｔ３　南部拡張区　石列
南から

Ｔ４　全景　東から

Ｔ４　全景　西から

Ｔ４　北壁　土層断面
南東から

Ｔ４　東端部
北から

Ｔ４　東端部
西から

Ｔ４　ＳＸ０４
北から

Ｔ４　ＳＸ０４
西から

Ｔ４　ＳＸ０４
北から

Ｔ４　ＳＸ０４
須恵器・製塩土器出土状況
北から

Ｔ４　整地層
西から

Ｔ４　整地層
東から

Ｔ４　西拡張区
西から

Ｔ４　西拡張区　土層断面
南西から

Ｔ４　西拡張区
西端土層断面
南から

Ｔ１　重機掘削　東から

Ｔ２　遺構検出　南から

Ｔ４　遺物検出　東から

Ｔ４　埋め戻し　西から

令和元年度地元説明会

令和２年度地元説明会

令和元年度古代官道調査委員現地指導

令和２年度古代官道調査委員会

1

6

5

10

11

12

13

16

14

15

26

27

24

28

17

22

8

9

25

18

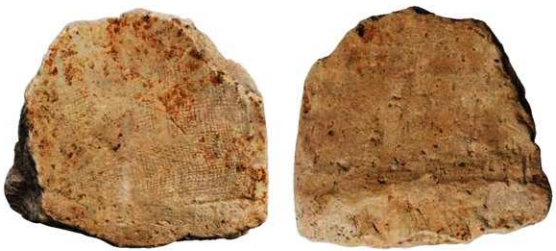
19

土器（2）

T1

T2

T3



T4

T5

T8

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦（1）

T6

T7

T9

T10

T12

T11

丸瓦（2）

T13　T14

T15　T16

T17

T18

丸瓦（3）・平瓦（1）

T19

T20

T21

T23

平瓦（2）

T22

T24

T25

T26

T27

T28

平瓦（3）

T29

T30

T32

T31

T34

平瓦（4）

T33

T35

T36

平瓦（5）

T37

T38

T40

T41

平瓦（6）

T39

T42

T43

T44

平瓦（7）

T45

T47

T46

T48

T49

T50

T51

斗瓦・鬼瓦

報告書抄録

ふりがな	ひょうごけんこだいかんどうかんれんいせきちょうさほうこくしょ5
書名	兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅴ
副書名	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第530冊
編集者名	池田征弘　中川　渉　新田宏子
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　℡079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　℡078-362-3784
発行年月日	西暦2023（令和5）年3月31日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　℡079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	調査原因
辻ヶ内遺跡	赤穂郡上郡町佐用谷120・121・122	28481	480294	34°51′55″	134°24′02″	20200219～20200319（2019087）	40	兵庫県内における古代官道に関する調査
	赤穂郡上郡町佐用谷121・122					20210224～20210317（2020116）	51	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辻ヶ内遺跡	官衙遺跡	奈良時代～平安時代	築地側溝	瓦・須恵器・土師器	古代山陽道高田駅家推定地 鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦

要約

辻ヶ内遺跡は、古代山陽道の高田駅家の推定地である。今回の調査で正方位に軸線をもつ築地痕跡が見つかり、鬼瓦や播磨国府系の軒瓦を含む大量の瓦が出土したことから、駅家の遺跡であることが確実となった。

兵庫県文化財調査報告　第530冊

兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅴ

令和5(2023) 年3月31日

編集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
℡079-437-5589
発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印刷　交友印刷 株式会社
〒650-0047　神戸市中央区港島南町5丁目4番5号